



第4号



2月23日 高野山の奥之院、普賢院





イメージキャラクターこうやくん

















追塩千尋先生と井野葉子先生







金剛峯寺でお茶とお菓子をいただく



六角経蔵 回るかな?

回った!





御利益めざして回せ回せ!



石舞台古墳



甘樫丘に登る



梅が満開





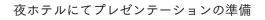






第5日





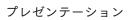




















岡﨑神社のうさぎのおみくじ

第6日

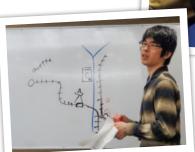














添乗員の平野さん



絵を描きました!

初夢



平成26年度 日本文化演習 報告

引率教員 井野 葉子

平成26年度の第12回日本文化演習は、平成27年2月23日から28日まで5泊6日間の日程で、和歌山、奈良、京都方面で実施されました。参加者は、1部20名、2部9名の合計29名の学生と、引率教員の追塩千尋先生と井野葉子、旅行代理店の平野達也氏、総勢32名となりました。1日だけ雨に見舞われたもののそれ以外は良い天気で暖かく、飛行機の運航も予定通りでした。体調を崩した学生もいましたが、全体的には大きなトラブルもなく、学生たちの満足げな笑顔があふれる旅となりました。研修日程は以下の通りです。

- 第1日 新千歳空港→関西国際空港→団体研修として、高野山の奥之院の見学、普賢院に宿泊して精進料理
- 第2日 団体研修として、普賢院で朝のお勤め、壇上伽藍、金剛峯寺の見学→奈良の飛鳥で石舞台 古墳、飛鳥寺の見学、甘樫丘への登頂→天理教本部の見学→京都着
- 第3日 団体研修として京都御所参観の後、自主研修として学生各自で行動
- 第4日 自主研修として学生各自で行動
- 第5日 自主研修として学生各自で行動→夜、グループ毎にプレゼンテーションの準備
- 第6日 グループワークのプレゼンテーション→関西国際空港→新千歳空港

昨年の10月にはガイダンス、10月末には事前レポートの提出、12月から1月にかけては、引率教員2名によるガイダンスと講義、グループ分け、グループ毎の準備学習などを行ないました。学生たちはそれぞれのテーマに沿って自主研修の計画を立てて、2月の研修旅行に臨みました。

団体研修では、高野山の宿坊に泊まったのですが、精進料理や朝のお勤めなど、学生たちにとっては貴重な体験だったようです。また、飛鳥の甘樫丘ではどんどん登って行かれる追塩先生の健脚に驚嘆したり、天理教本部ではその建物の大きさに目を見張ったり、京都御所ではその歴史的な重みに心を奪われたりと、いずれも思い出深い内容でした。自主研修では、各自が自分のテーマに沿って京都を歩いて回り、見て、聞いて、話して、味わって、嗅いで、触って、京都の文化を目一杯、心身に吸収してきたようです。最終日のプレゼンテーションでは、自主研修において見聞したことや考察したことを発表してもらいました。歌を歌ったり、絵を描いたり、入手してきた物を見せたりして、学生たちは工夫してプレゼンテーションを行なっていました。そして、その成果を文章にしたものが、この日本文化演習報告書です。学生たちの学びの成果を一読してくださると幸いです。

引率の教員として、学生たちが寝坊して飛行機に乗り遅れはしないか、体調管理は大丈夫だろうか等々、気苦労が絶えないのですが、学びの喜びに満ちあふれた学生たちの笑顔を見た途端に、それらの苦労はいっぺんに吹き飛びました。楽しい研修旅行でした。

2014年度 日本文化演習を終えて

引率教員 追塩 千尋

前回の引率は2011年であったので、今回は4年ぶりということになる。引率教員数はそのときは5名であったが、その後4名となり今回からさらに半減し2名となった。2名という数は少々不安であったが、参加学生が30名ほどと例年より少なく、添乗員の協力もあり、結果的には丁度よかったと思われた。ただ、旅行中体調を崩した学生があり、その対応に一時追われたが(幸い大事には至らなかった)、その時には2名という数は引率に際しての最低必要数であることを実感した。

コースを京都中心としたのは例年通りであったが、高野山に一泊したこと、高野山から京都に向かうときに飛鳥・天理市(天理教の本部施設)の見学を行ったこと、自主研修日を二日半と半日増やしたこと、などの点で例年とは少々変化を加えてみた。高野山や飛鳥・天理は京都から離れているのであまり行く機会がないと思われること、自主研修が二日では足りないという声があったこと、などに配慮したためである。結果、精進料理を初めて口にしたことや通常なら見学しない施設の拝観など、得がたい体験が好評だったようである。自主研修に関しては時間を半日増やしてもまだ足りないという声もあったが、そうした声はむしろ当然かもしれない。京都は汲めど尽きない場といっても過言でないので、学生は今回の研修をある意味出発点として、今後さらなる研修を深めていってもらいたいと思う。

この報告書に収められたレポートを一読して、正直感心した。最終日の自主研修の報告の時も感じていたが、皆熱心に自己の課題を追究しており、字数の制約はありながらもそれがレポートによく反映されていることである。修学旅行風にあちこち連れまわすよりも、自分なりの目的と観点をもって見学することの意義がよく伝わってくる。各自が設定した課題をみても、京都に関しては様々な切り口があることを教えられ、私自身参考になった。この報告書に目を通している新二年生は、参加することにより必ず得られるものがあることを認識して、是非一人でも多く参加することを望みたい。

さて、私は二日半の自主研修日は、必要もあって平城京・平安京の発掘調査などの成果の現段階を確認することに当てた。平城京の方は大した収穫は無かったが、平安京に関しては、事前に目を通していた高橋昌明『京都〈千年の都〉の歴史』(2014年、岩波新書)が非常に役立った。本書は単なるガイドブックではなく、まさに平安遷都から千年に及ぶ京都の歴史を叙述したもので、京都=平安時代といった往々にして陥りがちな固定観念を打ち破ってくれる書で、著者ならではの見所紹介も含めて「目からうろこ」の記述が随所にある。事前講義の時にはまだ読了していなかったので学生諸君には紹介しなかったが、この機会にお薦めしておきたい。

最後に、今回の旅行に際して教務上の事を中心に面倒なことの一切の段取りを行った井野葉子先生のご苦労に感謝し、結果として私は何もお手伝いできなかったことをお詫びして結びとしたい。

お寺と文学から見た京都

1部日本文化学科 2年 2713115 太田 悠哉

私は文化演習を行う前の計画では文学を中心に京都や大阪を見ていこうと考えていたが、所要時間や他の見学できそうな場所を調べていくうちに、文学だけでなくお寺もいろいろ見てみたいと思い予定を変更して京都にしぼって見学を行った。私たちの班は、行きたいところや目的がバラバラであったため、班行動と単独行動の両方を行った。以下、自主研修を行った日付にそって研修で行った場所や施設、その施設の概要、行こうと思った理由と感想を述べていく。

自主研修一日目 (2/25)

自主研修の一日目は、午前中に全体行動で京都御所に行ったため午後から始まった。こ の日は単独行動ではなく班で研修を行った。この日の全体行動では宇治に行った。宇治で はまず始めに、「源氏物語ミュージアム」を訪れた。ここは班員全員が、事前の話し合いで 行きたいと思っていた施設であり、特に私は文学に興味があり、日本の古典文学の中でも トップクラスの完成度を誇り今なお多くの人に愛される『源氏物語』を学ぶ必要があると 考えており、この施設には必ず行こうと決めていた。この施設では、『源氏物語』の概要や 作者紫式部についての説明はもちろんの事、この作品が書かれた当時の服装や文化、使わ れていたお香の香りなどがわかる。さらに、牛車や屋敷の模型などからは『源氏物語』の 場面を視覚的に理解する事ができるようになっている。ここを訪れて私は、今までよりも 平安時代の文化を理解し、『源氏物語』の舞台や作品に興味を持つ事ができるようになった。 「源氏物語ミュージアム」を出た私たちは、次に宇治神社、宇治上神社に行った。ここで は、宇治という事で、源氏物語のおみくじがあり、班員の一人が引くと、和歌などが書か れたとても美しいおみくじであった。神社を出た後は周囲の散策や昼食をとり、その後「平 等院」を訪れた。ここは私よりも、他の班員が行きたいと思っていたところであったため、 私は事前に何があるか調べはせずに入った。ここでは、阿弥陀如来が安置してある鳳凰堂 や、その中にあった雲中供養菩薩や、梵鐘などが飾られ、それを見学する事ができる鳳翔 館などがあった。私は鳳凰堂の中には入らなかったが、外から見てもその荘厳な造りに圧 倒された。鳳翔館では、飾られているもの一つ一つがとても興味深く、とても貴重な体験 ができたと思う。特に、雲中供養菩薩は、26体あり、一つ一つが違う形をしており、楽器 を演奏する菩薩などもありとても面白かった。「平等院」を出た私たちは、せっかく宇治に きたという事で、抹茶を飲んだ。とても濃厚でおいしいお茶だった。その後我々は宇治を 出て、京都タワーの展望台に行った。高所恐怖症の私にとってはこれも忘れられない体験 であった。

自主研修二日目 (2/26)

自主研修の二日目は、一日中自主研修であった。この日の午前中は班で行動し、午後からは単独行動とした。まず午前の班行動で向かったのは、南禅寺の中にある「金地院」である。金地院は、事前の話し合いの時から行きたいと思っていた場所である。ここでは通

常拝観に加え、ガイド付きの特別拝観も行っており、私たちはそれも聞いた。この特別拝観では、以心崇伝が、徳川家光を招くために作らせたという茶室を見る事ができた。その茶室は、小堀遠州が狭い茶室に様々な工夫を行ったものであり、説明を聞きながら見ると本当によく考えて作っているなと感心した。通常拝観の庭園もとても美しく、視覚で楽しむ事ができた。次に私は単独行動で、「鹿苑寺」、通称「金閣寺」に行った。ここは、三島由紀夫の『金閣寺』を読み、絶対に見ておきたいと思っていたため訪れた。主人公の溝口が魅了され、燃やした金閣がいったいどれほど美しいのかと思い見ると、復元とはいえとても美しかった。「なるほどこれは燃やしたくなる訳だ」とまでは思わないが、魅了される人間がいてもおかしくはないなと感じた。まして主人公のように毎日見ていれば、そのような精神状態になってもおかしくはないと感じた。この日は、「鹿苑寺」を出た後は、祇園や河原町を散策しホテルに戻った。

自主研修三日目(2/27)

自主研修の三日目は、一日中単独行動となった。この日私はまず、「伏見稲荷」に行った。ここは先輩に京都に行くなら一度は行った方がいいと言われ、興味を持ったため訪れた。自分が思ったよりも広く、鳥居が多く驚いた。登った稲荷山もそんなに高くないだろうと思っていたため、とても長く、思ったよりも高く、とにかく驚いた。観光客がとても多く、これだけ見所があれば当然だと思った。また、神楽では、儀式のような事がちょうど行われており、印象に残った。同時に、写真撮影にとても厳しく、専門の警備員が撮影しようとしている観光客にとても厳しく接していたのも印象に残った。「伏見稲荷」を出た私は次に、平安神宮に行った。ここでも私は、敷地の広さや鳥居の大きさに驚いた。そして自主研修の最後には清水寺を訪れた。清水寺は、高校の修学旅行でも一度訪れていたが、その時は全体行動であり、ゆっくり見る事ができなかったため、改めて訪れる事にした。前述の通り高所恐怖症であるため、清水の舞台はとても怖かったが、そこから見える景色はとてもきれいであった。また、バスガイドの人がぜひ下から舞台を見てほしいと言っていたため見てみると、木の組み合わせ方がとても複雑で感動した。また、縁結びの神様がいるというところでは、多くの観光客が、恋占いの石に挑戦していて、印象に残った。

おわりに

私は今回当初の目的とは異なり、多くのお寺や神社に行った。しかし、その多くの場所がとても興味深く、予定をこのように変更してよかったと思う。お寺のなかには今回の研修では行きたくても行けないところがあったため、機会があればまた京都を訪れ、今回行けなかったところにも行こうと思う。文学については、当初ほど文学に関連する施設に行く事はできなかったが、それでも日本古典文学の最高傑作といっても過言ではない『源氏物語』や、近代以降の文学者の中ではとても重要な人物である三島由紀夫の『金閣寺』の舞台である「鹿苑寺」を訪れる事ができ、とても勉強になった。また、今回訪れたお寺や神社にまつわる文学も探せばきっとあると思うので、そのような文学を見つけ出し、今回得た知識と重ね合わせながら読んでいく事を今後の目標にして行こうと思う。

和歌から見た、趣き深い京都

1部日本文化学科 2年 2713117 大橋 美穂

古都、京都。様々な文化や伝統が育まれたこの土地で、今回は和歌をテーマに過ごしてみました。

そのうちの短歌とは、古来より、想いを伝えたり考えを伝えたりすることに用いられてきた五、七、五、七、七文字で構成される詩のようなものです。特に、京都に都のあった時代には、短歌は特に栄え、たくさんの短歌が作られました。その中でも有名なのが、百人一首かと思います。

今回訪れた北野天満宮では、現代もかるたなどで楽しまれる百人一首が、一部ではありますが、額縁で飾られていました。ところで、北野天満宮と言えば、菅原道真公が学業の神様として祀られている場所です。境内に入ってから見える大きな門には、道真公を模した人形が安置されており、その隣には、道真公が大宰府に左遷される際に、愛してやまなかった梅に対して作ったという短歌も飾られていました。「東風吹かば 匂いおこせよ 梅の花 あるじなしとて 春を忘るな」。この歌は、梅に対して、自分がいなくても良き花をつけよ、と伝えた歌で、これを伝えてもらった梅の木は、道真公の傍にいるために大宰府まで飛んだと言い伝えられています。北野天満宮では、このような歌が作られるほど道真公が梅を愛していたということもあり、たくさんの梅が植えられていました。

同じ道真公を祀った、菅原院天満宮でも、同じくたくさんの梅の木が植えられていました。この菅原院天満宮は、道真公の邸宅のあった場所と伝えられているところにあり、その境内の中には道真公が五歳の時に作ったという歌も石碑として大切にされていました。「うつくしや 紅の色なる 梅の花 阿呼が顔にも つけたくぞある」。この歌にある、阿呼とは、道真公の幼名で、幼さの見える短歌と感じることができました。

和歌に登場する花には、前述した梅以外にもさまざまなものがあります。その中でも、同じ春に花を開く桜は、古くから日本で親しまれてきた花の一つです。研修では、梅がやっと見ごろを迎えようかという日取りで、桜のつぼみはまだまだ固く閉じられていました。その閉じられた桜のうち、見ごろが気になったものが、地主神社境内にある桜です。地主神社とは、京都東山にある、清水寺の奥にある神社で、京都では最古の歴史を有している由緒正しき神社の一つです。その境内にあった桜は、平安以前から植えられている物で、八重と一重が同時に一枝で花咲くという、世界でも貴重な珍種でした。日本国内では、現在、ここ地主神社でしか見られない桜で、古来より様々な人々に愛されてきたと言います。平安前後では、あまりの美しさに、天皇がお乗りになっている籠を止めてその桜に見惚れていたと伝えられていますし、また『奥の細道』で有名な松尾芭蕉の師である、北村季吟や宝井其角も歌で桜の美しさに触れているなど、たくさんの時代に愛されてきた桜であるとわかります。「地主からは 木の間の花の 都かな」(季吟)、「京中へ 地主の桜や飛胡蝶」(其角)。この二つの俳句は、桜の横にある立て看板にて、今もなお愛されていること

が見て取れました。

文学の中では『和泉式部日記』、また当時の和歌集にたくさんの和歌を残した和泉式部が、最初の住職であったという、誠心院にも足を運びました。誠心院は、町中の商店街に今もなお人々に愛されている寺院で、和泉式部のお墓もある場所です。現在の位置には秀吉の時代に移転を命じられて以降変わらずにあると言います。境内には、『和泉式部日記』にある内容と合った絵巻物の一部が飾られていました。また、中央の立て看板には和泉式部の詠んだ歌が残されていました。「霞立つ 春来にけりと 此の花を 見るにぞ鳥の 声も待たるる」。この歌は、軒端の梅を見て和泉式部が詠んだ歌で、春の待ち遠しさを窺うことができます。

そして、京都御所から近いところにある梨木神社にも訪れました。この神社には、京都 三名水という、茶の湯などに用いられてきた良き水が湧き出る地であり、京都の文化に大きく貢献した実萬公と実美公を祀った神社で、文化にとてもゆかりのある場所でした。鳥居の近くにはたくさんの石碑が並び、一つ一つに和歌が残されていました。そのうち、江戸後期の歌人であり茶人でもあった、『雨月物語』の作者、上田秋成の歌や、日本人初のノーベル賞学者の湯川秀樹の歌もありました。「ふみよめば 絵を巻きみれば かにかくに昔の人の しのばるるかな」(秋成)、「千年の 昔の国も かくやありし 木の下かげに乱れ咲く萩」(秀樹)。このように、京都御所から近い位置にあるこの場所で詠まれた歌から、歴史の長さや重みを感じる趣深い作品が数多くつくられたと感じました。また、萩の名所でもあるこの地の和歌には、萩を盛り込んだものも多いと感じました。ちなみに、この神社では和歌みくじと呼ばれる、可愛らしいおみくじも引くことができ、身近に和歌を感じることのできる場所でもありました。

このように、たくさんの寺社を中心に和歌にまつわる場所を研修としてまわりましたが、 このレポートにはまとめきれないほど和歌にまつわる場所があり、古都としての京都に驚 かされる研修となりました。また京都の中では今回訪れた場所以外にも、あちこちに和歌 を感じる場所がありました。歴史的にも文化的にも深い京都の中には、素晴らしいものに ついて重視した人々の心の豊かさを、たくさん見つけることができて、とても貴重な体験 をしました。

それから、京都市内には一般宅も含め、桜の木や梅の木、椿の木など、季節ごとに楽しめる木や花を植えている所をたくさん見つけることができました。和歌の世界では季節ごとの花やそれをまじえた美しさがとても重要になると考えていたために、現在の京都での趣深さに触れることができたのではないかと思います。

今回の貴重な体験を生かし、様々な観点を持って日本文化により一層親しくなりたいと 思った研修となりました。

研修旅行を終えて

~動物のいる神社を巡る~

1部日本文化学科2年 2713118 沖 愛瑠

私は「動物のいる神社」をメインにおいて、神社や仏閣を巡った。普段、特別意識して 見ることのない、「神の使い」としての動物へ目を向けた。

京都、動物のいる神社と聞いて、まっさきに思い浮かべるのは伏見稲荷大社だろうと思う。伏見稲荷は狐を神使として祀っており、境内のいたるところに狐がいる。今回はそうした狐のように、神の使いとして存在する動物は他に何がいるのかについて、あまり足を運ばないような神社へ足を向けてみることにした。

特に、実際に行った神社の中で私の印象に残っているのは、イノシシを祀っている「護 王神社」とうさぎを神使としている「岡﨑神社」である。

護王神社は、和気清麻呂と彼を護ったと言われるイノシシを祀っている神社だ。清麻呂は平安京の遷都に貢献した人物である。彼は、法王となり権勢をふるっていた弓削道鏡の野望を暴いたことで、大隅国に流されることになってしまった。その際の道中で刺客に襲われ足の筋を切られてしまう。一行が豊前国に差し掛かったとき、どこからともなく 300頭ものイノシシが現れ清麻呂の周りを護りながら 10里の道を案内し、去って行った。それと同時に、清麻呂を悩ませていた立つこともできなかったほどの足の痛みも不思議とすっかり治っていた。こうした清麻呂とイノシシの伝説から、護王神社は足腰の健康にご利益があるとも伝えられている。足腰の健康を祈願するお守りもあり、境内にある足型の石に乗ることでご利益を得られるとされている。

護王神社では、狛犬のかわりに、狛イノシシが建てられており、今も清麻呂を護っている。狛イノシシだけでなく境内には多くのイノシシがいたるところに置かれており、清麻呂と参拝客を見守っている。特に目を奪われたのは、膨大な数が奉納されているイノシシコレクションだった。こう言うと失礼にあたるかもしれないが、異彩を放っているとも言える。日本全国のみならず、外国からのコレクションも多数陳列されているらしい。また、イノシシの形をした素焼きの中におみくじが入っているのもユニークでおもしろい。色もさまざまで、思わず手に取らずにはいられない。

岡崎神社は速素盞鳴尊(はやすさのをのみこと)、奇稲田姫命(くしいなだひめのみこと)、 三女五男八柱御子神(やはしらのみこがみ)を祀っている。このご祭神二柱の神様が子宝 に恵まれた多産の神であったことから、安産、子授けのご利益があるとされている。

岡崎神社の神使はうさぎである。もともと境内を始めとした地域一帯が野うさぎの生息地であったことや、古くから多産なうさぎは神使として伝えられることから反映されたのであろう。境内にもうさぎが多くおり、可愛らしく神社を見守っている。まず目に付いたのは、本殿前の阿吽の狛うさぎである。向かって右側の阿の口をしたうさぎが雄、左側の

吽の口をしたうさぎが雌を表わしている。頭をなでることで、夫婦和合や縁結びのご利益があるとされる。今にも動き出しそうな愛嬌のある顔立ちで驚いた。狛犬の表情はいかにも護ってますという感じが前面に出ているというのに、ここのうさぎの愛らしさときたらつい時間をかけて撫でてしまう。また、多産なうさぎらしく子授けうさぎの像もあった。御影石でできたうさぎの像に水をかけて腹をなでながら祈願すると、子宝に恵まれ安産になるとされる。月を仰ぎ体に力を満たしたうさぎからは母としての満ち足りた純粋な力を感じさせられた。この神社にもおみくじの入ったうさぎがいた。白と桃色のうさぎの二種類で、顔立ちが少し違う。それぞれに愛らしい。

神使というと、狐や狛犬のイメージが強く他の動物はあまりイメージがなかった。しかし、こうして調べて足を運んでみると実際には多くの動物が神使として祀られ大事にされていることがわかった。こんな動物も神使なのだと、ただ知るだけでなく、なぜそうなったのかという背景を調べ理解するのもおもしろかった。どういった経緯で神使となったのかを知ることで、神使だけでなく、神様や神社そのものに親しみを持つことができるようになったと思う。背景を知るという視点をもって、今まで行ったことのある神社にももう一度行ってみたい。これまでの私とは少し違った視線、姿勢で神社という不思議で神秘的な場所を見ることができるのではないかと思う。

また、今回、多くの神社や寺院を訪れることで、参拝の方法や礼儀を再度確認することができた。神社の入り口たる鳥居は、人間の家でいう玄関である。頭を下げずに鳥居をくぐるのは、挨拶もなしに土足で立ち入るようなものだと聞いたことがある。確かに、そうして見てみると、鳥居は私たちの日常の空間と、神の社という聖域をしっかりと分け隔てている。当たり前にただそこになんとなく存在しているものではなく、意識を向けてみると、すべてのものにはなにかしらの意味があるのだと気が付く。

御朱印も趣味で集めていたが、それがただのスタンプラリーにならないように、参拝する姿勢を見直すことができた。御朱印をもらう前に神様に挨拶をする。時間に追われていたことも相まって、基本的な、根本的な目的をはき違えてしまっていた。それに気が付くことができて本当によかった。

今回の旅行を通して、普段は気にしないことや、おろそかになりがちなことが目に見えてきたように思う。集団での旅行は高校の修学旅行以来だったが、個人旅行では体験することができないようなことも経験することができ、有意義な時間を過ごすことができた。この5泊6日で学び、感じてきたことを糧にして新しい視点で物事を見られるようになりたいと思う。

日本文化演習を終えて

1部日本文化学科 2年 2713120 小澤 太志郎

今回、日本文化演習に参加し、6日間の日程で関西を回ることで、これまでに経験してこなかったことを体感することができた。また、今回の演習では京都だけではなく、関西のあらゆるところを見学できたという点でも非常に面白みのある 6 日間を過ごすことができた。

この研修の前半は団体研修であり、各地名所についてガイドの人々が紹介し、その文化について深く学ぶことが中心に行われ、私もたくさんの文化について学ぶことができたと思う。その中で特に私が印象に残っているのは初日、2日目に行われた和歌山での団体研修だ。初日に訪れた和歌山県にある高野山奥ノ院周辺において豊臣秀吉や織田信長などの歴史的な有名人、世間的に知られている会社や企業の墓を見学してから奥ノ院の拝観をしたことで、高野山という町の歴史や、歴史的建造物の醍醐味、ルールについて深く学ぶことができた。その後、高野山普賢院という寺で宿泊し、寺での朝のお勤めをはじめ、にんにくやねぎなどの辛みのある野菜、肉や魚などを摂取することを禁じ、精進するために編み出された寺での食事である精進料理を食べ、寺で僧侶がどのような生活を過ごしているかを実際に体験することができた。二日目には、空海が開いた平安仏教である真言宗の活動の拠点ともなった金剛峯寺本寺を拝観し、年末の紅白歌合戦の後番組で使われている除夜の鐘を実際に見たことなど、高野山では様々な貴重な体験をすることができた。そのほか、奈良の天理教本部や京都御所など関西各地を団体研修では見学することができ、今まで触れることがなかった宗教についても多く触れることができたのでとてもいい体験ができたと私は感じている。

後半の個人研修では、京都を舞台に事前に決めていたテーマに沿って自主的な研修を行い、最終日にプレゼンを行うという内容だったが、私たちのグループでは、充実した活動を行うことができた。私達のグループでは、幕末をテーマに取り上げて幕府・新撰組・坂本龍馬について関連のある名所に向かい実際に見ることで知識を高めることができたと思う。実際に訪れたのは、徳川家に関連しており大政奉還や将軍就任などの歴史的な行事が実際に行われた二条城、新撰組の兵法調練場であり、武芸や大砲の訓練が行われていた記録が残っている壬生寺、坂本龍馬が斬られた刀などが寄贈されている霊山歴史館や坂本龍馬の墓が置かれている東山区である。個人研修は、団体研修と異なり拘束されずに自分たちのペースで各地を訪れることができたことから気楽に京都を楽しむことができた。

ここから個人研修で訪れた名所について簡潔な感想を述べていく。二条城では二の丸 御殿や庭園など、見ていて面白いと感じるものが非常に多かった。特に、二の丸御殿の 中を拝観した際にウグイス張りの床や、大政奉還などの行事がどのように行われたか人 形を置いてその様子を再現していたのを見ることができ、当時の生活を思い浮かべるこ とができた。また、天守閣の跡地にのぼることもでき、二条城周辺の京都を眺めることもでき、非常にいい体験だった。次に壬生寺では、歴史資料室、暗殺された新撰組局長である芹沢鴨と隊士・平山五郎などの墓の見学をした。実際に壬生寺に行って驚いたのは、柿本人麻呂の墓も壬生寺にあったことである。壬生寺の事前学習では、新撰組にまつわる知識しか身に付けていなかったので私達も訪れた時は驚愕し、稽古していた新撰組の人々も柿本人麻呂の墓を見ることで驚いていたのではないかと想像したくらいである。最後に東山区では、霊山記念館で坂本龍馬や新撰組に関連している寄贈品の見学や、坂本龍馬の墓の訪問などを行い、幕末の知識を蓄えることができた。また、近くにある清水寺の拝観や、茶屋に入りお茶と団子をつまみながら京都をいろんな面で満喫することができた。最終日のプレゼンでは、訪れた名所の資料や蓄えた知識を基に、今回の研修にきている人たちに幕末の魅力を知ってもらうための良いプレゼンができたのではないかと私は考えている。

今回の研修を通して、教科書や学校の学習で知ることができた歴史、建造物は、実際に見ることで感動だけでなく関心を持つことができるということを知ることができ、名所や町などの観光などでもそうだが、遠い土地でも現地に向かいその場所を感じることは非常に大切なことであると再確認することができ、事前学習の大切さを感じることができた。何故そう思うかというと、今までの修学旅行などでは観光地の事前学習を行っておらず知識がないまま名所を訪れていたからである。なので、今回の個人研修において自分でテーマに沿った名所を巡って知識をさらに蓄えるという経験も私にとって非常に大きいものになった。また、関西の名所では観光に合わせてパンフレットや看板が多くの言葉で書かれているという点や、名所周辺の市街が発展していることにも目を向けていた私は、日本の名所の良さをそのままにグローバル化が進んでいるのではないかということも考えていた。関西に存在する日本の名所は世界的にも有名であるという事を、その点やその場の外国人の多さで実感することができたというのも、今のグローバル化が進んでいる時代に生きている私達にとって決して無駄ではないと私は考える。

寺に宿泊することなどの今後経験できるかどうかわからない体験、異なる地方の歴史 建造物をテーマに沿って巡っていくという貴重な体験をすることができた今回の研修は、 私にとって今後に影響するいい機会となった。今回の研修を機に日本文化に触れてみた いと感じるようになり、知識をさらに蓄えていきたいと考えるようになった。また、今 後様々な地方に行く機会があると思うので、その際には、その地方にある多くの名所を、 テーマを決め、そのテーマに沿って巡ってみたい。

京都が見せた様々な景色

~庭園が持つ魅力に触れる~

1部日本文化学科 2年 2713122 加賀田 咲

京都と言えば海外からも多くの観光客が訪れるように、誰もが一度は見たくなるような独特の和の景色を見せてくれる場所である。今回の関西への研修旅行にて、私は京都の各寺に造られた庭園を巡り、それぞれの庭園が持つ様式の美しさに触れてくることをテーマとした。

まず私が見た庭園は大徳寺内の龍源院である。この場所は方丈・玄関・表門がどれも創建当初のもので、さらに方丈は大徳寺山内で最古の建物だそうだ。方丈には南・東・北と3つの庭園があった。南の庭園では、白砂が敷き詰められた中に直径1メートルほどの丸い苔山や並び立つ石組が目を引いた。白砂は大海原を表しているだけあり、どこまでも砂が続いていくような広大さが感じられた。東には日本最小の庭園と言われている東滴壺と呼ばれる庭園があった。小さいながらもその庭の佇まいは凛としたものがあり、思わず背筋を伸ばしてしまうような緊張感が味わえた。北には杉苔が広がっていて、白砂とは違い伸びやかな雰囲気が漂っていたように感じた。

次に詩仙堂内の庭園にも訪れた。この庭園では敷かれた白砂以上に、庭内の多くのサツキに目がいった。通り道を歩けば右にも左にも植物が広がっており、花が咲く時期であれば豊かな自然を存分に味わうことが出来るのだろうと想像出来た。建物の中に入って庭に近付いた時には、どこからともなく鹿おどしの心地よい音が聞こえてきた。自然に囲まれながら耳に届く音も楽しむことの出来る庭というものはとても贅沢なもので、この庭を造り上げた石川丈山が老隠の慰めとしたというのも頷ける。

修学院離宮では、下離宮・中離宮・上離宮の3箇所をそれぞれ見て回った。中でも上離宮内にあった浴龍池が印象に残った。ここは池をぐるりと一周できるような道があり、それに沿って観覧していった。人工池ではあるものの、やはり回遊式庭園のその大きさは目をみはるものがあった。離宮内で最も高い場所から池を眺めると、島と島をつなぐ橋や御舟遊びの場所が一望でき、そののびのびとした風景に癒された。この離宮は後水尾上皇が自ら設計を考えたものだと事前の学習で知っていたが、いざ自分の目で離宮を見て、橋や庵、灯籠の設置などを一つ一つ自らで考えていたのかと思うと、上皇の腕の凄さに感動を覚えた。

智積院の庭園は訪れた時修復工事が行われており、庭園内の水が抜かれた状態であった。 しかし、それ故に石組みと植込みによる魅力をより知ることが出来たように感じた。また、 大きさもそれぞれで小さなものと大きなものが程よく並んでいたため、繊細な庭だという 印象が自分の中に残った。

そして私がもっとも大きな衝撃を受けたのは、東福寺の方丈の庭園である。この庭園は

東・西・南・北に分かれているが、このように方丈の四周に庭園を巡らせたものは東福寺 の方丈のみなのである。東の庭では、まるでトイレットペーパーの芯のような真ん中に穴 の開いた柱石が7つ配置されていた。この柱石は等間隔ではなく少し不均等に並んでいた ので不思議に感じていたのだが、それは7つの柱石を北斗七星に見立てていたことによる ものだと知り驚いた。西の庭では、刈り込まれたサツキにまだ花がついていなかったこと で少し寂しさはあったものの、サツキが市松模様に区切られていて新鮮さを感じた。同様 に北の庭でも敷石と苔が近代的な模様である市松模様に配置されており、新鮮さそして斬 新な造形に息を呑んだ。この庭は作庭家の重森三玲によって昭和 14 年に作られただけあ って、とてもモダンな味わいで、それまで自分が抱いていた「日本の庭園は砂が敷き詰め られ、石が置いてある」という漠然としたイメージを大きく覆すことになった。この市松 模様は左から右に行くにつれて等間隔に並んでいた敷石と苔が点々としていき、まばらな 配置へと変化していた。まるで苔の緑が自然に消えゆくかのような儚さを感じたが、これ は背景の自然に敷石と苔を溶け込ませるためであり、また左から右つまり東から西に仏教 が広がったことを意味していると寺内の説明書きに書かれていた。それを知り、この庭園 に対する重森氏のこだわりを強く感じることが出来た。南の庭は広さ210坪というのが頷 ける、東西南北の庭の中で一番大きいものだった。白砂が放つ静けさの中に堂々と立つ巨 大な石がお互いを引き立てているように感じられた。

また、東福寺では今回「京の冬の旅」と題した普段は非公開の文化財の特別公開を行っており、東福寺の中の龍吟庵も見ることが出来た。龍吟庵にも東・西・南に庭が配置されていて、それぞれ独特な雰囲気を漂わせていた。東の庭はそれまで見てきた白砂による枯山水庭園ではなく、赤砂が使われていた。それにより少し庭に派手さが生まれ、独特な庭という印象を受けた。雨が降ると赤砂がまるで小豆のように、その赤みがより鮮やかなものになるそうだ。西の庭では白砂と黒砂の2色の砂を利用していて、色のコントラストによって生まれる情景を楽しむことが出来た。そして、木も草も一本もない白砂のみで造り上げられた南の庭では、その簡素さに逆に惹きつけられ目が離せなくなった。

今までガイドブックや本の中の写真でしか見たことのなかった庭園を自らの目でしっかりと直接見たことで、庭園が持つ生命力を全身で感じることが出来た。同じように見える庭などなく、共通しているとしたらそれはそれぞれの庭が自らの個性を余すところなく表現している点だと感じた。そして、どの庭が劣っている、勝っているということではなく、一つ一つの庭園にそれぞれ味があり放つ雰囲気も違っている点が「日本庭園は生き物だ」と言われる所以なのではないだろうか。これは北海道では見ることが出来ない芸術であり、京都という存在が見せた素晴らしい魅力だと思う。今回は庭園というスポットから京都の景色に触れたが、またいつか京都を訪れる時があればその時は仏像や建物自体の外観など、別の観点から京都という場所を見つめたい。

関西研修旅行レポート 色彩編

2部日本文化学科 2年 2813107 角田 美由紀

「京都の色といえば、何色?」と聞かれたら、何色を思い浮かべるだろう。例えば、宇治抹茶の鮮やかな緑色や、神社仏閣・古き良き日本の住宅に見られる、ほうじ茶のような淡い茶色などの落ち着いた色合いが、京都の色として結び付きやすいだろう。私は今回六日間の関西研修旅行で、「色彩」に重点をおいて過ごしてきた。北海道の日常から離れ、実際に目で見て感じ取った「色彩」についてまとめてみることにする。

まず、団体研修で訪れ、宿泊した和歌山県の高野山。和歌山県は果物栽培の盛んな土地で、なかでも有名なみかんは全国で親しまれている。高野山の奥深く、弘法大師空海の居る奥之院という場所は、荘厳な空気の中、立ち並ぶ蝋燭に灯された炎が放つ鮮やかなオレンジが目を引いた。和歌山県ではオレンジが心に残る色となった。奥之院に向かうまでの道のりは膨大な数のお墓と高齢の樹木に囲まれた山道で、苔生した墓石が時の流れを感じさせた。空気は澄んで透明だった。翌日は、見学した金剛峰寺の茶室にて、緑茶とお煎餅をいただいた。部屋には仏教の曼荼羅や黄金の仏画などが壁に掛けられていた。その中でも興味を持ったのは、金色の水彩点描仏画。仏を描いた絵は数多く存在するが、点描で幻想的に描かれたこれには、注目して貰いたい。次いで向かった奈良県の飛鳥寺では、日本最古の釈迦の銅像を見ることができた。飛鳥寺の内部や周囲の街並みまで木造の建築物が多く、銅像の存在感が相まって銅色の印象が強い奈良県であった。

そして残りの四日間を過ごすこととなった京の都。京都は日本の古都として、街の広告に制限をかけて景観を崩さない工夫を念入りに行っており、祇園に向かうと某コンビニエンスストアの看板はおなじみの青ではなく、茶色で大人しい配色になっている。

京都に限らず、関西の街には違和感があった。よく観察していると、「青色がない」のである。道路の看板や標識を除けば、企業の看板や広告でさえ、青色を掲げるものは非常に少なく、赤や橙など暖色系のものがほとんど。不思議だなぁ、と思ったが、これは北海道出身者だからこそ感じるものではないか。雪が日常に根付いた土地では雪から連想される白や青といった色合いが好んで使われ、温暖な関西では暖かい色を用いるなど、広告の配色に地域性が表れているのだろうと考えた。そこからは、京都という地で意識的に青色を探す旅となった。

グループ研修では「京都の食文化」をテーマに、食文化ミュージアムで京料理の歴史などを調査した。京菓子や京漬物、季節ごとの行事食などの展示も豊富に存在し、視覚的にも楽しめる施設であった。さらに、京菓子資料館という場所では、糖芸菓子という、実物の花そっくりに作られた大きな和菓子の展示を見ることができる。京都の和菓子の歴史や、菓子図案などの資料も公開されている。和菓子は日本を代表する桜や梅を題材としたものや、紅葉した赤黄色のもみじを模ったものなど、花の形が好まれるようで、自然を愛する日本人らしい感性が伝わってくる。和菓子には和歌にまつわる名前がそれぞれにつけられ

ているそう。京料理の基本は、「赤・青・黄・白・黒」の五色だそうで、青が含まれているが、どちらかというと植物からくる緑色が主であった。

グループを離れた単独行動の際には、京都府立植物園と京都国立博物館に足を運んだ。雨が降る二月末の植物園は枯れ木ばかりで寂しかったが、梅が見ごろで、日本の春を表現した展示もあった。広大な敷地の一角にある温室の中に入ると、世界最大の花ラフレシアが出迎えてくれ、奥に進むと世界中の温暖地域の植物が所狭しと立ち並ぶ姿が圧巻だった。次に向かった博物館では、募金や支援品販売など重要文化財保護が徹底されていた。一階に巨大な大日如来坐像をはじめとした仏像と特別展示の雛人形、二階に絵画と絵巻、三階に石器などの出土品と、日本の歴史を物語る重要文化財がそれぞれに展示されていた。館内は薄暗く小さな明かりのみで厳格な空間が演出されており、作品を美しく見せてくれる。ひとつひとつじっくり観察した結果、最後の三階に至ってふと気が付いたことがある。武器や鏡など多様な用途で盛んに用いられた、青銅器。ご存じかとは思うが、見ると青というよりも緑に近い色合いをしている。先述の京料理の色然り、青と称しながら実際には緑色であることから、かつての日本では今でいう「緑」つまり「GREEN」のことを「青」と呼んでいたのだろうということが実感として理解できた。植物を青いと言う習慣は今でも残っているが、自分の足で訪れ、自分の目で見て腑に落ちたことが感動的だった。

京都の街を歩くと、建物が落ち着いた色で統一されているため地味なイメージを持ちやすいかもしれないが、仏教に関わりの深い場では金色と、朱塗りの建物が目立っている。京菓子に目を向ければ、鮮やかな赤や桃色が古くから人々の目を楽しませてきた。日本人が愛した庭園を覘けば、青々とした木々がのびのびと息をしている。龍安寺などに代表される枯山水の庭は白と黒のコントラストが美しい。研修中ずっと探してきた青色は、陶磁器などの食器の彩りに大活躍しているのを発見できた。京都は、知れば知るほど色彩豊かな街になっていった。観点を絞っての色彩を巡る旅はなかなか面白いものだったと思う。

最後に、自分が訪れて心惹かれたものを紹介したい。龍安寺と金閣寺の間に位置する奇妙な外観の建物、堂本印象という京都出身の画家の作品展示を行う美術館にお邪魔した。日本画を学んだのち、独自の世界観で抽象画を手掛けるようになり、美術館の抽象画のような外観もすべて印象本人が手掛けたものであった。館内で知ったことだが、私たちが行った高野山金剛峰寺内で、彼の描いた仏画が使用されていたのだという。茶室で見た仏画とは異なるため、もう一度訪ねてみたくなった。さらに、京菓子資料館にも彼の作品が一点飾られているのを確認でき、私たちの辿った道には堂本印象の足跡が遺されていたことに一人感動を覚えた。もう一つ、京菓子資料館には「菓子考源氏五十四帖」という『源氏物語』の世界観を表現した和菓子の絵図があり、日本画と和菓子と文学を同時に楽しめる資料として興味深いものであった。振り返ると何もかもが現地の土を踏まなければわからないことだらけで、此度の研修旅行は「参加してよかった」の一言に尽きる。

約三年ぶりに関西に行って帰ってきた話

1部日本文化学科 2年 2713123 掛田 将司

月並みな言葉かもしれませんが、研修旅行では自分で見ることによって、神社仏閣など の雰囲気を感じることができたと思いました。

初日と二日目は高野山に上り、様々な仏閣や仏像を見ましたが、その中でも一番印象に残ったのは高野山の上の風景です。真言宗の総本山だという知識ぐらいしかなかったため、建造物はせいぜいお寺とお坊さんたちの寄宿舎ぐらいしかないのだろうな、と思っていました。しかし、実際には普通の住宅や食堂、コンビニまでもがあり、そしてその辺の人々も、お坊さんの親族の方が多いのかもしれませんが、子供連れのおばあちゃんがいたりして何とも生活感にあふれた街になっており、少し登別の温泉街にも似ているように感じました。

その後、ガイドさんに連れられていろいろなお墓のあるところを見ましたが、歴史と由緒ある墓も多い中、半ば企業のPRのような、例えばロケットの部品を作る会社だとロケットの形を模していたり、大きく企業名が書いてあったりするユニークなお墓も多く見られました。

そして 2 日目の朝、我々の宿泊施設も兼ねた普賢院で朝のお勤めに参加したのち、地下 の様々な仏具を保管している場所に行き、お釈迦様のお骨の一部ということで「仏舎利」 を見せてもらいましたが、「シャリ」の名の通りお米のようだったのが非常に印象的でした。 その後、バスで石舞台古墳を経由して飛鳥寺に向かい、日本に現存する最古の仏像であ るという飛鳥大仏を見せていただきました。やはり仏像として初期型ともいえるだけあっ て面長でアーモンドの種のような形の目をしており、昔修学旅行で見た奈良の大仏などの 多くの人がイメージするような大仏と比べるとスマートな印象を受けました。このような 大仏の顔の造形を「アルカイックスマイル」といい、ウルトラマンの顔はここからきてい るという話を聞いたことがあります。またこの飛鳥寺は今でこそ周りを畑に囲まれたのど かな風景に包まれたどこにでもありそうなお寺のように見えましたが、かつては元興寺と も呼ばれており、蘇我氏・物部氏という派閥の政争が繰り広げられていたはるか昔に建立 されたのだといいます。そのころはとても大きなお寺であり、現在も飛鳥寺の周りではそ の建物跡の発掘作業がされていました。そしてお寺を裏口から出て少し歩くと蘇我入鹿の 首塚があり、さらにその向こうの甘樫丘(あまかしのおか)というかつて蘇我氏の本拠地 であった丘に登り、大和三山を一望してきました。飛鳥寺とその周辺では古代から今へと 移り変わる時の流れを自分の身に感じることができ、札幌にいたら決して体感することの できなかった感覚を得ることができたと思います。

次に自主研修の話に移りたいと思います。私は「稲荷信仰」を自主研修の研究テーマと して伏見稲荷大社を中心にいろいろな稲荷神社を見て回ってくることを考えていました。 しかし、天気や私自身の体調などもあり結局伏見稲荷以外に行く予定の神社は今一つ満足 には見ることができませんでしたが、その分、伏見稲荷は十分に堪能することができたと 思います。

伏見稲荷は意外と京都駅から近く、JR 奈良線で2区間、時間にすると10~15分程度乗って稲荷駅で降りればすぐ目の前にあります。まず金ぴかの稲の東をくわえている狐の像がお出迎えしてくれます。余談ですが「稲荷」というのは読んで字のごとく稲の神、つまるところ豊穣神であり、かつては狐はあまり関係なく、そのうちに日本の食物の神の総称の「御食津神(みけつのかみ)」と狐の古語である「けつ」や「けつね」が結びついたことによって狐を使役する神様、という認識が広まったという説があります。そういう意味でこの像は初心を忘れていない証なのかな、と思いました。

境内の奥のほうに「おもかる石」というものがあり、願い事をした後にこれを持ち上げて思っていたより重く感じたらその願いはかなわず、軽く感じたらその願いはかなうというものです。私自身も持ち上げてみたところ思ったより重くは感じましたが、後であの石はやっぱり軽かったと考えることにしました。

そのあと伏見稲荷名物の千本鳥居をくぐり稲荷山へ登って行きました。鳥居を見て分かったことですが、鳥居は一本一本が個人や企業の寄贈でできており、電通などの名だたる大企業の名前も見られました。またその中に高野山の名前が刻まれたものを偶然見つけ、私は偶然とはいえ不思議な縁のようなものを感じました。さらに小さな祠が稲荷山のあちこちにあり、これも鳥居のように企業や団体などが寄贈したもののようでした。雰囲気こそ前述の高野山のお墓にも似ていましたが、こっちのほうはどちらかというとひっそりとしていたため、企業 PR というよりは願掛けのような印象を受けました。

稲荷信仰の深層部分まではこの研修で感じ取ることはできなかったかもしれませんが、 稲荷大社には前述の小さな祠なども含めた分社が数多く存在しており、そのあたりから稲 荷信仰の幅広さ、懐の深さを感じ取ることはできたのではないかと思います。こういうこ とから考えると、いわゆる「信仰」というのは人の心のよりどころという部分が大きいと 考えていいのだと思います。だからこそ元々豊穣の神であった稲荷は農耕国だった古代日 本で多くの人の心のよりどころとなって、結果として全国に何万社という分社が立ち、農 業に関係ない分野にもご利益をもたらすまで信仰が広がり、そして今なおいろいろな人が 伏見稲荷大社を訪れて参拝したり祈願したりしているのだと思います。おそらく日本人に 最も親しまれている神様というのは稲荷さんで間違いないのではないでしょうか。

だいぶ長くなってしまいましたが今回の研修旅行では長い間行くことを望んでいた伏見 稲荷大社に行けて本当に良かったと思っています。生で感じた経験を活かして今後の課題 に取り組んでいきたいと思っています。

歴史と文化の中心地京都を歩く

1部日本文化学科 2年 2713124 片岡 紘基

2月23日から2月28日までの6日間、日本文化演習で関西方面を訪れ、北海道とは異なる風土を感じるとともに歴史や文化に触れることができた。団体研修では高野山の奥之院、壇上伽藍、金剛峯寺、飛鳥寺、天理教本部、京都御所などを訪れた。研修初日は高野山の普賢院という宿坊に泊まり精進料理や朝のお勤めを体験することができた。

今回の研修旅行で私は京都という日本の歴史の中心地に実際に訪れることで、自分の目で伝統ある日本の歴史や文化の舞台を実際に見て見聞を広め理解を深めることを目的にした。自主研修ではグループの時と個人で行動する時があった。グループとして訪れたのは、源氏物語ミュージアム、宇治上神社、平等院、金地院である。源氏物語ミュージアムはその名の通り紫式部によって書かれた『源氏物語』をテーマとしてつくられたミュージアムである。ミュージアム内には復元模型や映像を通して『源氏物語』や平安時代の文化を学べるような工夫が施されていた。私がそこで印象に残ったのは「香り」である。平安時代の貴族社会の中で「香り」は芸術的な文化として発展していたという。貴族は香りを配合してつくり、それを披露する「薫物合わせ」を楽しんでいた。白檀や丁子、欝金などの香りの原料となるものが展示されており実際に香りを嗅ぐことができた。

平等院では 10 円玉で有名な鳳凰堂を見学した。平等院は 1052 年、関白藤原頼通によって父道長の別荘を寺院に改め創建されたものである。その翌年に阿弥陀如来を安置する阿弥陀堂が建立され、それが現在鳳凰堂と呼ばれている。鳳凰堂の中には阿弥陀如来坐像が安置されており、これは平安時代を代表する仏師定朝作であることが確実な唯一の仏像であるという。また、鳳凰堂には 52 体の雲中供養菩薩像と上の上から下の下までの 9 通りの来迎を描いた壁扉画がある。雲中供養菩薩像は楽器を演奏していたり、舞を踊ったり、合掌したりしている姿をしていて一体一体すべて異なる姿をしていた。併設されている鳳翔館という博物館は平等院の貴重な宝物類を保存、展示している。雲中供養菩薩像のうち半分の 26 体は鳳翔館に展示され、鳳凰堂にはレプリカの 26 体が置かれている。平等院鳳凰堂は誰もが 10 円玉で見たことがあると思うが、実際に見ると水面に映る鳳凰堂の姿と合わせてとても美しく見えた。

個人での自主研修で訪れた場所は、京都国立博物館、豊国神社、方広寺、北野天満宮、 伏見稲荷大社、清水寺である。京都国立博物館は 2014 年 9 月に常設展示館として平成知新 館がオープンした。私は学芸員課程を履修していることもありぜひ訪れてみたいと思って いた。北海道の博物館との違いを感じながら展示を見ていった。国立の博物館ということ で所蔵している資料も多く、周りの寺社から重要文化財の資料を借り受けていることも分 かった。展示室に入場してすぐに金剛力士像や不動明王坐像、大日如来坐像、阿弥陀如来 坐像などが展示されておりいきなりその迫力に圧倒された。展示内容は 1 年の間に何回も 変わるようで来るたびに変化が感じられる。私が訪れた時は特別展示室に特集陳列として 雛まつりをテーマにした展示が行われていた。私たちが想像する雛人形ではなく、華やかな屋敷をそのままミニチュアにしたような雛人形が展示されていた。雛人形を飾るようになったのは意外にも新しく江戸時代のはじめということであった。博物館の展示は 1 階から 3 階までで彫刻から金工、漆工、絵巻、絵画、陶磁、考古など 1 日いても飽きないほどの豊富な資料が展示されていた。

次に方広寺である。方広寺で有名なのが釣鐘である。徳川家康が豊臣家を攻撃するため 釣鐘の内容に難癖をつけ、これを大義名分に大坂の陣を仕掛けたというのが俗説である。 今回実際に見に行くと「君臣豊楽」「国家安康」の文字が分かりやすいように白く書かれて いた。しかし、釣鐘には多くの文字が書かれているのにこの部分を見つけた家康側は豊臣 家攻撃の口実を探すのに必死であったことがうかがえるのではないだろうか。また、釣鐘 だけに注目しがちだが釣鐘の天井を見ると鮮やかな天井画を見ることができる。

北野天満宮は高校生の時修学旅行で一度訪れていた。しかし、その時は季節が秋であったため梅を見ることはできなかった。北野天満宮は学問の神様として親しまれている菅原道真を祀った神社である。「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」という道真が大宰府に左遷させられる時、自邸の梅の花に対してこの別れの歌を残したとされる。そのため道真を祀る北野天満宮は梅の名所として約50種、1500本の梅の木があり、春に一斉に梅が咲き誇る。梅苑に入ってみるとちょうど梅が見頃であった。前日の雨で花びらが地面に多く落ちていたがそれもまた風情があった。梅苑ではお茶菓子を食べながら梅を見ることができ、まったりとした時間の中に梅の花が咲く姿はとても美しいものだった。また、北野天満宮といえば牛である。道真と牛の関係については諸説あるが、とにかく牛との結びつきが多いのである。北野天満宮の中には多くの牛の像がある。撫でると病気が良くなることや頭が良くなることがいわれている。もちろん私も牛を撫でて、頭が良くなるように祈った。境内の牛はほとんどが横たわって座っているが、一匹だけ立っている牛がいるという。なぜ立っているかは不明だそうだ。

伏見稲荷大社は全国の稲荷神社の総本宮であるとともに千本鳥居が有名である。稲荷山を頂上まで登ってみたが非常に疲れた。歩けど歩けど鳥居は延々と続いていく風景に途中諦めようとも考えたが、最終的に頂上に着くことができて良かった。登っている最中に鳥居の塗り替えや、鳥居を修理しているところを見ることができた。千本鳥居はなにか神々しい、不思議な感覚だった。また、持った時に軽いと思ったら願いが叶う「おもかる石」に挑戦したが、予想より重かった。伏見稲荷大社を訪れて思ったのが、外国人の方が非常に多いことである。なんでも外国人が選ぶ日本の観光地1位であるらしい。

今回の研修旅行では様々な場所を訪れることができた。京都は日本の古都として古い町並みを残しつつ現代まで発展してきた場所ある。観光地として、文化遺産として、歴史・伝統の場として京都の果たす役割の大きさを感じた。日本文化を学ぶ立場として今回日本文化演習に参加できたことを大変嬉しく思う。

関西研修旅行

2部日本文化学科 2年 2813109 上村 しおり

2月23日から28日の6日間、和歌山、奈良、京都に日本文化演習研修旅行へ行きました。この旅行は自分にとって、文字や写真で理解する以上のより深い知識を得られるようになるための学習的な研修旅行として非常に楽しみでした。また、昨年に世界遺産検定も取得していたため、全体で行く予定の高野山をはじめ、自主研修の3日間でさまざまな京都の世界遺産を見てまわることができることも楽しみでありました。

様々なところを見て回りましたが、一番高野山が印象的でした。高野山とは和歌山県北東部にあり、弘法大師空海が平安時代前期に創建した金剛峰寺を中心とする真言密教の霊場です。金剛峰寺を中心とした建造物は標高 900 メートルの山上の平地に建っており、宿泊施設である宿坊や商店、病院、消防署などもあり、街の郊外のようなところでした。イメージしていた山奥とはまるでちがい、正直唖然としました。弘法大師空海が入定されている聖地という奥之院を見て回り、豊臣秀吉や石田光成、加賀前田家二代利長などの諸大名の墓や、平清盛と弘法大師が対面した場所にあったという対面桜や、国宝の不動堂、白河法皇の命により建てられた国史跡である東塔など、歴史ある建物をたくさん見ることができました。こうして並べて記すだけでも分かるように、古くは平安時代から長い年月をかけてこの場所が崇拝されていたことがわかります。また、これらの歴史ある建造物の回りには、山の上であるため多くの杉の木が生えており、一部では空を覆うほどの高さに成長しており、その場の異様な、かつ神秘的で厳かな空間を感じることができました。

次に興味深かったのは、高野山の次に全体で回った天理教本部です。天理教本部は奈良 県天理市に存在し、江戸時代後期から始まった天理教の本部が置かれているところです。 天理教徒以外の人からすると、この地は極めて馴染みが薄いところだと思います。市や村 にある寺社に比べるとその差はよく分かるでしょう。その神社が何を祀っているのか、ど のようなご利益があるのかなどをあまり理解しないまま、正月やお祭りなどに手軽に寺社 に出向くことが多々あると思います。しかし、天理市は市全体が天理教のまちであり、い たるところに母屋と呼ばれる参拝者のための瓦屋根の宿泊所が立ち並んでいて、「天理教」 と書かれた黒い法被を着て歩いている人たちがたくさんいます。私たちも説明を聞き、参 拝させていただきました。この日は高野山を降り、飛鳥寺を見た後に訪れたのですが、一 日のうちに二つの宗教の話を聞いたことにより、それぞれの違いを、よりはっきりと感じ ることができました。その一つは、仏教には宗派がありますが、天理教には宗派がないと いう点です。高野山の金剛峰寺は真言宗、また比叡山延暦寺は天台宗といったように、仏 教は根本が同じだとしてもそれぞれ宗派で異なっています。天理教にはそのように分かれ ている宗派はなく、全国、世界各地に存在する天理教教会、布教所もすべて同じ目的の下、 同じ信仰をしているのだと教わりました。もう一つは、信者の年齢層が広いという点です。 高野山では年齢層の高い方々が多く訪れていた印象をもちましたが、天理教本部の建物の

中には高齢の方々の他に親子連れや高校生などがいて、その年齢層の広さに驚きました。 外からではあまり理解できないこの場所は信者にとって手軽に訪れることができる聖地で あるのだろうかと疑問に思いました。また、天理教本部の敷地内に建てられている建物の 大きさ、広さも圧巻でした。その日以降にも色々な寺社を見てまわりましたが、ここ以上 に広い敷地を持つ寺社はなかなかないと思いました。さらに、驚くことに天理市天理駅で は、遠くから参拝にやってくる信者のためにフェリーなどの交通費用の割引も行っている そうです。私のイメージとして、天理教は名前はよく知られているが教理などはあまり深 く知られていない宗教だと考えていました。しかし、年齢層の広さやそれに伴う大勢の信 者、建物や敷地の広さなどを実際に見てみると、もしかするとそのようなことは全くない のではないかと思いました。交通費用の割引なども全国に信者をもっているからこそでき る取り組みであって、北海道にも多くの教会、また、韓国など海外にも布教所などがある そうです。今回このように天理教本部を見学させていただいて、私たちが日常であまり感 じていないだけで、天理教は実はとても大きな宗教の一つではないのかと考えざるを得な い経験となりました。また、今回このように、一日に二つの宗教の聖地を訪れてお話を聞 くことができ、ある宗教から見た他宗教など視点を変えて物事を捉えることにより、宗教 だけにとどまらずそれらの物事をより深く、違った面から比較するなどして掘り下げてい けるという考え方などもとても勉強になりました。今後の専門分野の勉学に役に立つ貴重 な経験をさせていただきました。

京都市内での自主研修では世界文化遺産「古都京都の文化財」に登録されている建造物を中心に歩き回りました。賀茂別雷神社(上賀茂神社)や、賀茂御祖神社(下鴨神社)、教王護国寺(東寺)、龍安寺や仁和寺、慈照寺(銀閣寺)に本願寺(西本願寺)、京都市を出て宇治市の平等院や宇治上神社など多くの建造物を訪れました。その他にも京都国立博物館や、三十三間堂なども見てきました。移動は主に徒歩と市バスで、京都の街の空気も感じながら2日半、様々なところへ行きました。昨年の夏に友人と2人で原爆ドームと厳島神社と姫路城を見に行った際に感じたことですが、日本に住んでいるのだから日本の世界遺産は自分の目で見ておく必要があると思います。外国の方たちに対して、日本にはこのような素晴らしい場所があるのだと胸を張って説明することもできます。また、自国の文化を形成してきた歴史の中でキーポイントになってきた建造物など、日本の歴史を知る上で欠かすことのできないものばかりだと思います。日本人として身につけておく必要のある知識だと考えたため、今回、実際に京都の世界文化遺産を見て回りました。

今回の研修旅行は、個人で行く旅行とは全くちがい、団体で行動することも含めて身の 引き締まる思いで様々なところを見学することができ、また、引率してくださった追塩先 生や井野先生がいたおかげでさらに深い話を聞かせていただくことができるなど、とても 貴重な体験をさせていただきました。様々な歴史建造物や文化財、京都の街並み、人、文 化、衣食住など本当にたくさんのことを感じることができた 6 日間でした。以後、この経 験を生かし、3 年生からの日本文化、日本史の勉強に役立てていきたいと思います。

京都で辿る平家の栄枯盛衰

1部日本文化学科 2年 2713131 木下 剛志

私が今回の日本文化演習における個人のテーマとして選んだのは、平家についてである。何故このテーマを選んだかといえば、その理由は大きく2つある。1つ目は「機会の無さ」だ。私は小学6年時に1度、そして高校2年時の修学旅行の際の合計2度、京都を訪れる機会があった。しかし、どちらの訪問でも平家に関する寺社などを巡ることはできなかった。私は昔から平家に関しては関心を持っていたので、こうした事態はとても残念だった。そこで、今回の自主研修では平家を取り上げたいという考えに至ったのである。2つ目は「大河ドラマ」だ。2012年に放送された大河ドラマ「平清盛」を見て、平家が栄華を極めたのも都落ちして離れたのも京都だと改めて認識することができた。つまり、京都は平家の栄光と転落双方の象徴とも考えられるのである。こうした2つの経緯から、今回のテーマとタイトルを設定した。それでは、私がこのテーマに基づいて実際に自主研修で訪れた箇所について1つ1つ注目していく。

まず、取り上げるのは三十三間堂である。三十三間堂は小学 6 年時にも参拝したのだが、 当時の私はここが平家にゆかりのあるところだとは理解していなかった。この三十三間堂 は正式名称を蓮華王院といい、平清盛が朝廷を懐柔する目的で祖父・正盛や父・忠盛のや り方にならって創建したものが祖だったのである。その後清盛が創建した建物自体は焼失 してしまったため現存していないが、現在の三十三間堂の規模以上のものだったと推定さ れているので、当時の平家の財力と繁栄ぶりを実感することができた。余談だが、千体の 観音像が並ぶさまは圧巻の一言だった。

次に取り上げるのは六波羅蜜寺である。この寺の周辺にはかつて清盛や重盛をはじめとした平家一門が館を構えていた。一門の都落ちや戦乱の過程で邸宅も六波羅蜜寺も度々焼けてしまったため、当時の様子は想像することしかできないというような状態である。だが、境内には清盛を祀る塔があったり宝物館には出家後の清盛の坐像があったりと、現在でも平家とのつながりを連想させる貴重な文化財が残されていた。あまり実感は湧かなかったが、平家がこの六波羅に拠点を置いていたことから、この辺りが当時繁栄したのは間違いないだろうと思われる。他に私が訪れた場所としては若一神社と西八条邸跡などの西八条周辺がある。若一神社には清盛が植えたと伝わる楠が残っているようだが、私が西八条に到着した時点ですでに日が落ちていた上に、京都駅でのグループ内での待ち合わせ時間に間に合わなくなるという懸念から、あまり詳しく参拝することができなかった。悔いの残る結果なので、次に京都を訪れた際にはじっくり見学したい。

さて、ここまで述べてきた箇所は清盛を中心とした武家としての平家の繁栄を窺い知ることのできる寺社だった。ここからは私が今回訪れた、建礼門院徳子にゆかりのある平家の衰退を象徴する箇所を取り上げていく。私には建礼門院徳子こそが平家の栄枯盛衰を体現しているように思えてならない。徳子について少々記すなら、清盛の娘として生まれ、

高倉天皇に入内し、子を安徳天皇として即位させて国母にまで上り詰めたが、一門の者たちが増ノ浦で入水する中で自身も入水するが源氏方に引き上げられて生き残り、侘しい余生を過ごしたという人物である。そのような経歴を持つ建礼門院に、特にゆかりのある寺社が京都には複数ある。そのうちの 1 つが東山の長楽寺である。長楽寺は建礼門院徳子が実際に出家した寺である。そのため現在でも徳子に関する貴重な品々が残されている。具体的には建礼門院が髪をおろしたとされる建礼門院御塔や、建礼門院の像、安徳天皇の御影などである。他にも、複製ではあるが建礼門院が実子である安徳天皇の形見の直衣で自ら縫って寺に納めたとされる幡を見ることができた。また長楽寺の文化財の中で、私が最も衝撃を受けたものは建礼門院自身の御影である。この御影はとても黒ずんでおり、寺の人間が源氏方の目を恐れて墨で塗ることで隠していたという経緯があったのだ。私は出発前の事前学習でこのことを知ってはいたが、実際に見るとやはり衝撃は大きかった。その理由はこの御影をめぐる一件こそが建礼門院自身や平家が衰退し滅亡していったという事実を象徴しているように思えてならなかったからである。天皇の后にまでなった人物の御影がこのような扱いを受けるのは現在では到底考えられず、当時が動乱の時代だったということをあらためて痛感させられた。

長楽寺の他のもう 1 か所は大原の寂光院である。京都駅からバスに乗車しバスに揺られ ること 1 時間以上をかけて、ようやく辿り着くのが大原という地である。ここは同じ京都 市内ではあるものの賑やかな京都駅周辺とは異なり、とても静かな場所である。寂光院は 大原のバス停から徒歩 10 分以上離れた場所にあり、寂光院へ向かう道の途中で建礼門院に ゆかりのある朧の清水を見ることができた。そして私は今回の自主研修での最大の目的地 である寂光院に到着した。残念ながら本堂は平成 12 年の火災で焼失したため復元されたも のだが、復元された六万体地蔵菩薩立像や建礼門院・阿波内侍の像も見ることができた。 寂光院には『平家物語』の大原御幸の中で登場する汀の池や姫小松などが当時のまま残っ ていて、平安時代の建礼門院が寂光院で過ごしていた頃の様子をまざまざと感じることが できた。他にも境内には苔むした一角に建礼門院の庵室跡の碑があった。この庵室跡がた いへん侘しいところで、国母だった女性が晩年をこのような静かな場所で過ごさねばなら なくなったというのはまさしく『平家物語』でいう諸行無常なのだなと感じた。また、宝 物殿には建礼門院が自身の髪を縫って作ったとされる南無阿弥陀仏の落髪名号が展示され ていて興味深かった。寂光院の境内ではないが、近隣には阿波内侍や右京大夫らの小さな 墓や宮内庁管轄の建礼門院の陵である大原西陵も現存していた。大原はたいへん寂しく静 かで、それが衰退し滅び行く平家の行き着く地点だったという必然に個人的に納得するこ とができた。ただ、建礼門院は京都御所で生活していた時期もあり、同じ人物が寂光院と 京都御所の二か所の両方に住んだことがあるという事実はたいへん感慨深いものがあった。 やはり私には建礼門院徳子の存在が平家の京都での栄枯盛衰を象徴しているように思えて ならない。今回の日本文化演習では普段札幌では味わえない雰囲気の中、普段は見られな いものを見て見聞を大いに広げることができた。とても有意義な時間だったと感じる。

見る京都、食べる京都、歩く京都

1部日本文化学科 2年 2713203 近藤 加奈絵

私はこの日本文化演習に参加するにあたって何をテーマにするかを考えた時に、「食文化」をテーマにすることにした。その理由としては、「和食」が無形文化遺産となったことや、「和食といえば京都」というイメージがあること、さらに、私自身が和菓子などを好きだということが挙げられる。また、この「食文化」をテーマにした時に、自分の中でさらに三つサブテーマを設けた。「見る」こと「食べる」こと「歩く」ことである。私の中で、この旅行中はできるだけ自分の足で「歩き」様々なものを「見て」様々なもの、そこでしか味わえないものを「食べる」、ということを目標にした。その三つに注目しながらこの旅行を振り返ってみようと思う。

まず、一日目には高野山を歩いた。お墓ばかりで有名な歴史上の人物のお墓もあり独特の空気の場所だった。宿泊した普賢院では精進料理を食べた。精進料理は、テレビで紹介されていたりするので漠然としたイメージはあるものの、実際には食べてみたことはなく興味があった食べ物である。実際に食べてみて感じたのは「味がうすい」ということだ。どの料理も味付けが基本的にうすく、素材そのものの味やだしの味がよく感じられた。シンプルな料理が多く、一つ一つは量が少ないのに食べてみると意外と量があり、品数も多いので、完食するのがなかなか難しかった。一番印象に残った食べ物は干し柿の天ぷらである。果物を天ぷらにする、という発想がなかったので「これは何だろう」と思いながら食べて干し柿だったのでとても衝撃的だった。

二日目以降の食事は自分で済ませるのだが、特に私はこの旅行中での食事は、できるだけ「その地でしか味わえないものを食べる」ということに気をつけながら、何を食べるか、どのお店に行くか、ということを決めた。

二日目の朝も精進料理。まさに誰もが想像するような「和食」という感じの朝ごはんで、白米にお味噌汁、それに副食である。京都の食の基本である「一汁三菜」の料理だった。量や品数は十分なのだが何だか少し、物足りないと感じた。お昼は奈良県で旬の野菜を使ったパスタを食べた。大根やキャベツ、ブロッコリー、ホウレンソウなど様々な野菜がふんだんに使われたパスタで、まさに地元のランチカフェ、といった場所であった。手作りのパウンドケーキもおいてあり、持ち帰りにして買ったのだが、帰り際に店員さんが追いかけてきて「あっためて食べるとおいしい」と教えてくれて、なんだか暖かい気持ちになった。晩ご飯もパスタ。今度はだしにこだわったパスタのお店で食べた。私は鴨と白ネギの入ったパスタだったのだが、普段鴨肉を食べることはないので、新鮮だった。鴨肉がパスタにも合うのだと驚いた。また、二日目は主にバスでの移動だったのだが、北海道では考えられないような細さの一本道に、なかなかのスピードをつけて観光バスが突っ込んでいくので、関西は運転手の技術が高いのか、と思う反面、ところどころでぶつかりはしないのか、とひやひやした。

三日目の朝はおにぎり。もちろんコンビニのおにぎりではなく地元のだし茶漬けのお店のおにぎりである。前の晩に買っておいたものを食べたのだが、冷めていてもおいしい。特にお米。北海道でもおいしいお米はあるが、それとは違ったおいしさがあった。お昼は「雪ノ下」というパンケーキのお店でフレンチトーストを食べた。フレンチトーストに使われているパンは京都で有名なパン屋さんのパンだという。晩ご飯はお好み焼。ここでも関西方面でしかない「笑い焼」という普通のお好み焼きよりもふわふわしたものを食べた。普通のお好み焼きよりも柔らかくふわふわした触感で面白かった。

四日目の朝は、前日の朝も食べたお店のだし茶漬け。とても食べやすく、さっぱりした味だった。自主研修では食文化をメインに京都食文化ミュージアムや京菓子資料館などへ行った。食文化ミュージアムの資料によると、京都は全国から様々な文化が入り、栄え、発達していたことから、「季節感」「おもてなしの心」「本物へのこだわり」といった精神文化が京都の食文化にも浸透しているという。私たちは普段から食事の前後に必ず「いただきます」「ごちそうさま」という。それは食に対して、自然や命への感謝の気持ちのあらわれであり、「もったいない」という気持ちや食材を無駄なく大切に使う「始末する」心を併せ持っているのだそうだ。また、京都の食は、主食のごはんに副食を組み合わせた「一汁三菜」が基本である。その中でも「おもてなしの心」から京都料理、というのは五色(青、黄、赤、白、黒)、五味(甘味、酸味、塩味、苦味、うま味)、五法(切る、煮る、焼く、揚げる、蒸す)、五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)で楽しむものだそうだ。京菓子資料館では、和菓子の主な原材料や、生地の種類といったことから京菓子の歴史についてまで学ぶことができた。また、様々な和菓子の図案が展示されていて、それぞれが色鮮やかでとても面白かった。

五日目は班の人とは別れ、別行動したのだが、まず北海道にはないカフェ Lipton でモーニング。地元で有名なゆずのジャムがついてくるトーストを食べた。その後、梅小路公園を歩き回り梅の観察をし、様々なものを歩いて見て回った。また、京都水族館や六角堂にも行った。ちなみにこの日は帰りに乗ったバス以外は全て歩きである。バスからの風景も楽しいが、歩きながら気になったところを見て回れるのはとても面白いと感じた。また、有名な手毬歌「まるたけえびすにおしおいけ〜」というのに登場する通りを歩いてみた。思ったよりも距離があって、昔の人はこれだけの距離をよく歩いていたなと驚いたのと同時に、本当にその並びの通りなのだと感動した。自分の足で歩いてみてよかったと思う。

振り返ると食べてばかりのような気がするが、この旅行でメインテーマの「食文化」について食文化ミュージアムや京菓子資料館で学びながらも様々な場所を「歩き」、様々なものを「食べ」、様々なものを「見る」というテーマに忠実な旅行ができたと思う。京都にとっての食文化とは、京都、という町の文化の一部で、京都にはなくてはならない、大切な文化なのだろうと思う。また、京都の人は食べ物を大切にし、たくさんの観光客に対して「おもてなしの心」を持っているなど、文化を大切にしているのだなと感じた。

日本庭園を巡って

1部日本文化学科 2年 2713141 笹 恵菜

私はこの研修旅行で、たくさんの日本庭園を見学してきました。自主研修 2 日目には大徳寺、詩仙堂、修学院離宮、3 日目は東福寺、智積院、平安神宮へ行きました。日本庭園は大きく分けて枯山水庭園と池泉庭園の 2 種類があります。研修内で見てきた中では、枯山水庭園では東福寺と大徳寺龍源院が、池泉庭園では修学院離宮が強く印象に残っています。東福寺は、方丈の「八相の庭」が有名です。方丈とは禅宗寺院における僧侶の住居であり、この方丈の東西南北に配置された 4 つの庭園を「八相成道」にちなんで「八相の庭」と呼びます。東福寺方丈は明治時代に焼失・再建されており、庭園は重森三玲によって昭和 14年に完成しました。当寺の創建年代にふさわしい鎌倉時代庭園の質実剛健な風格を基

調に、現代芸術の抽象的構成を取り入れた近代禅宗庭園とされています。確かに方丈北庭 の市松模様のサツキと敷石は、今まで見てきた庭園とは全く違い現代的で、とても不思議

な感覚でした。

さらに、普段は公開していない庭園が特別に公開されており、同じく重森三玲の作った 石庭を見ることができました。赤い砂利を使って作られた庭園は、私が今まで見てきた石 庭とは全く違い、庭園を見ているような気がしませんでした。特別公開は予想だにしてい なかったのですが、偶然にもこのような素晴らしい庭園を見ることができたので、本当に 良かったと思います。

東福寺の庭園は過去と現代が融合した、他にはない不思議な庭園でしたが、大徳寺龍源 院の庭園は室町時代の雰囲気がそのまま残っているようでした。禅宗庭園である龍源院の 庭は、それぞれ岩の配置などにも深い意味があり、それを自ら発見し体得することが目的 とされていたそうです。龍源院の方丈の北側にある竜吟庭は、室町時代に画家として活躍 していた相阿弥の作品です。一面に敷き詰められた苔は大海を表しており、石は陸地を表 しています。そして、たくさんの石の中でも特に目立つ中央の突出した石は、須弥山を表 しています。須弥山とは、仏説によると、この世界は9つの山と8つの海からなっており、 その中心であるとされています。また、誰一人として窺い知ることのできない真実の自己 本来の姿、誰もが本来具え持っている超絶対的な人格、悟りの極致の形容でもあるそうで す。加えて、この須弥山石の手前に遥拝石と呼ばれる板石がありますが、これは理想や目 的に一歩でも近づこうという信心の現れとされています。もちろん、私は庭を見ただけで はこれらを理解することはできませんでした。むしろ解説を読んでもよくわからないとい うのが本音です。しかし、この庭を作った相阿弥はこれらのことを踏まえ、細かなところ まで計算しつくしたうえで作庭したということにとても驚き、感動しました。おそらく竜 吟庭だけでなく他の庭も、それぞれの石や砂に深い意味が込められているはずなので、次 に庭園を見に行く際は、自分なりにその意味を探ってみるのも面白いと思いました。

方丈の東側には、日本最小の石庭といわれる東滴壺がありました。畳 2 畳ほどの細長い

石庭で、両端に置かれた石と波紋、真ん中を流れる線によって、一滴の水が小川となり大河となり、大海にまでなる様子を表しています。これほどの小さな石庭でも、とても大きな世界を表現していることに感動しました。

池泉庭園で一番感動した修学院離宮ですが、修学院離宮は宮内庁が管理している場所で、事前申し込みが必要などいろいろと大変でしたが、行って本当に良かったと思いました。まず、普通の寺などにある庭園とは規模が違います。修学院離宮は上・中・下の 3 つの離宮からなり、それを巡るだけで 1 時間ほどかかります。また、敷地内には田畑が広がっており、宮内庁から依頼を受けた一般農家が現在も畑作を行っています。その中には棚田もあり、そのスケールの大きさが窺えます。上離宮にある池は舟遊びができるほどの広さで、圧巻でした。修学院離宮は後水尾天皇によって造営された天皇家の山荘であり、そのため敷地内に様々な建物が残っています。これらの建物から見る景色はどれも素晴らしく、後水尾天皇やその家族もこの景色を見ていたのだと思うと、感慨深いものがあります。また、修学院離宮は山の麓にあるため、上離宮からは京都市内を見下ろすことができます。後水尾天皇たちもそこから街や人の様子を眺めていたのでしょうか。私が見学に来た日はあいにくの雨だったので、機会があれば、天気のいい他の季節に来て、今回見た修学院離宮とは違った景色を見てみたいと思います。

今回の研修旅行は、たくさんのことが学べて、なおかつ楽しいこともいっぱいあり、あっという間の5泊6日でした。初日は高野山の普賢院に泊まりましたが、寺に泊まるというのは研修旅行ならではで、とても貴重な体験でした。精進料理は本当に肉や魚がなくて、食べ終わっても何だか物足りない気がしました。朝のお勤めは眠いし寒いしで辛かったですが、これも一生に一度体験できるかどうかのことなので、参加して良かったと思います。全員で見学した高野山や飛鳥寺は、まるで高校時代の修学旅行のようで面白かったです。

大学生ということもあり、とても自由で長い自主研修でしたが、想像以上に時間が足りなく、まだまだ見てみたい庭園が残っています。また、今回行った平安神宮や修学院離宮は、季節の関係で葉のついていない木もたくさんありました。桜の咲く春や紅葉の秋、葉が青々と色づく夏など、それぞれの季節で見える景色が大きく変わると思うので、季節ごとに訪れたいと思いました。

京都と文学ゆかりの地

1部日本文化学科 2年 2713145 笹原 春香

この関西研修旅行で、私は、明治以降の京都に関する日本文学と、その基盤となった京都の文化・歴史を感じることを自主研修のテーマとした。また、同グループの全員のテーマがほとんどばらばらであったことや、京都という土地柄から、テーマに設定はしていなかったものの、古典文学に関連する場所やものに、訪れた先々で触れることができたので、そのことについても書いていきたいと思う。

2月25日、自主研修1日目は、全体での京都御所見学が終わったのち、半日が自由行動となっていた。私たちのグループは、まず京都御所近辺の梨木神社に向かった。梨木神社の前や中には和歌が刻まれた石碑が多くあり、江戸時代に『雨月物語』を書いたとされる上田秋成終焉の地であったり、『源氏物語』において貴族が多く住む設定とされているゆかりの地であったりと、京都において様々な時代で文学に深く関わる神社だということが感じられた。その点は現代にも続いていて、『西の魔女が死んだ』などの著者である現代の作家、梨木香歩のペンネームもこの神社が由来であるらしく、梨木神社が時代を超えて文化的に愛されている場所であることがわかる。

1日目の自主研修の中で最も印象的だった場所は、その日最後に行った京都国立博物館 である。国立の博物館ということで、ある程度の規模はあるだろうと構えていたが、予想 以上の大きさ、内容量で、閉館1時間前に行ったのだが、全てをじっくり見ることは到底 叶わなかった。博物館の展示場所は、明治時代に建てられた「明治古都館」と、平成にな ってから新しく建てられた「平成知新館」があり、多くの展示は「平成知新館」で行われ ている。研修時は「明治古都館」での特別展覧会は無い時期で、「平成知新館」の名品ギャ ラリー及び特別展観、特集陳列のみの観覧となった。それでも展示スペースは1階から3 階まであり、彫刻、書跡、子どもの衣装、刀などの金工、昔の化粧道具、絵画や絵巻物、 古墳時代の銅鏡、焼物など幅広く展示されている。京都の歴史、文化、ひいては日本の文 化が凝縮した場所であるように感じた。展示の中には『源氏物語』の絵巻物などもあり、 昔の人々が楽しんでいたそのままの姿で物語を見ることができた。京都国立博物館では、 展示物だけでなく、建物そのものにも価値があり、「明治古都館」と、現在は一般客用の出 口である正門は、重要文化財に指定されている。博物館の入口から「平成知新館」へは「明 治古都館」と正門の間を横切って通るので、明治時代に建てられた建物の威厳を感じなが ら、この古い博物館の建物が周囲にとけこんでいた明治時代の京都の街並みを想像させら れた。

自主研修2日目で行った鹿苑寺金閣は、自主研修の行程の中でも、私が最も行きたいと望んでいた場所だといえると思う。高校の修学旅行では行くことができなかったことに加え、三島由紀夫の『金閣寺』をこの研修の前に読んでいたためである。この日は雨が降っており、いい条件とはいえなかったが、写真などで見慣れていない金閣の姿を見ることができたことも良かったと思う。また、雨でも金閣は金色に輝いており、現実の事件を元に

したフィクションの小説ではあっても、『金閣寺』の主人公も、このような雨の日の金閣を見た日があったのだろうなどと想像した。金色の建物が大きな池の中に浮かぶ姿は外国にも人気が高いのか、見て回っていると周囲からは外国語が多く聞こえてきた。入場の際にもらった案内や説明が書かれた紙にも、日本語と同じ大きさ、量で英語、中国語、韓国語が書かれていて、金閣が観光地として名高いことを改めて感じた。また、時代は少し戻るが、『金閣寺』のなかでも、戦争後、主人公がアメリカ軍人に英語で案内をする場面があったことを思い出した。『金閣寺』は実際に金閣が焼かれた事件を元にして犯人の心情に沿うように書かれているが、金閣は燃やされた後に復元され、今はほぼ元の姿で存在する。『金閣寺』では、主人公は金閣に執着し、逃れようとしながら、金閣を絶対的な存在としてとらえ、囚われ続ける。金閣は永遠のものとして書かれていて、それ故に主人公は「金閣を焼かねばならぬ」と執念を燃やし、実行にまで至る。現実の放火犯がそう考えていたのかはわからないが、文学のなかではそのように燃やされた金閣が、また復元されて今の時代にも存在することを考えると、本当に永遠の存在のようで面白いなと感じた。

この日、バスで市街地に戻りホテルまで歩いて帰ったが、このときに偶然、梶井基次郎の『檸檬』で書かれている寺町通を通った。『檸檬』は、病の主人公が書店に檸檬を置いて立ち去るという動きをする間の主人公の心情を細かく描いた短い作品である。モデルとなった書店もなく、そのときはただ通っただけで何を見つけたわけでもなかったが、著者本人とされるその主人公が通った場所であることに気が付き、少しながら思いをはせることができて嬉しい気持ちであった。

3日目は、朝から宇治へ行った。宇治では『源氏物語』ゆかりの場所も多く、駅から出たとたんに源氏物語らしい門が見えて、「宇治十帖」と地名がそのままつけられているだけのことはあると感じた。また、午後から行った下鴨神社では、咲いている花を由来として「紫式部の庭」と呼ばれる庭があり、その1日でのつながりを感じた。

自主研修の時間としてこの関西研修の中で与えられた3日間、京都のなかを動き回って、改めて、日本の中心地として発展してきた京都と、そこに染みついた歴史、根付いている文化を見ることができた。伝統的な文化があったからこそ、そのなかで物語も多く生まれてきたのだろうし、その物語がまた京都の文化の一部となっているのだろうと感じた。現代の文学でも、京都を舞台にした作品は、京都という独特の土地がひとつの重要な要素であることが多いように思う。私が今回の研修で、より京都に魅力を感じたように、京都を描いた多くの作家たちも、長い歴史と伝統を持つ京都に、またその歴史そのものにも惹きつけられているのだろうと感じた。今回、自分の興味のあるテーマで京都の様々な場所を巡るのはとても楽しかったが、あまり多くの作品を読まずに行ったことが悔やまれるため、もっと関連する作品を読んで、より知識を蓄えて、いつかまた京都に訪れる日に備えたいと思う。

寺と神社とときどき建物

2部日本文化学科 2年 2813119 佐野元紀

私はこの日本文化演習レポートのタイトルをこう名付けたが、京都という都市の感じとしてはむしろ真逆というか、道を歩いているとどでかい神社仏閣に遇うといったような感じで、建物の間々に普通に神社仏閣があったのだ。私としてはこのことが自分の研究テーマよりもビックリしたことなので、こういうタイトルを付けた。さて私の日本文化演習の自主演習の研究テーマについてだが、それは日本文化についてである。行く前の事前レポートによると、「京都という平安から江戸時代にいたるまで、日本の中心であった京都で、古来の日本文化とそのルーツというものが分かる。」みたいなことを書いたと思うが、大まかに日本文化について理解することが研究目的だった。

色々な諸事情で予定を早めなければならないこともあったが、ほぼテーマに沿った行動ができたと思う。そこで私の自主研修の行動を書いてみる。

初日の行動は、私は最初に考えた 2 日間だけが自主研修の日であると恥ずかしながらも 勘違いしてしまっていたので、3 日目、京都御所を見学してからの行動が未定であった。な ので、前日京都に入ってからどこに行くかを決めたのだ。よって、その予定はかなり適当 な予定であったのでそこは目をつむってほしい。さて、私は一応友人とのグループであっ たのだが、私の研究テーマと友人の研究テーマは関係しているところもあったが、違うテーマであったので、本来なら京都演習の 2 日目と 3 日目で行くところを別々に担当した。 であるので、初日の演習の予定は話し合って決まった。その予定は高校時代に行っていな かった神社仏閣で有名なところを時間内で行く、と言ったようなかなり適当な計画であっ た。そして、行きやすそうなところで共通して行っていなかったところは、金閣銀閣であった。そこで、友人と私は、一度行ってみたかった金閣銀閣に行くという計画を立てた。 しかし、これだと帰りが早すぎると思ったので、途中にあった下賀茂神社という有名な神 社にも行くことにした。

まず初めに行ったのは鹿苑寺金閣だったが、私はそこまで期待していなかった。(いくら金箔を貼っていたとしても写真で見たことがあるし、そこまで……)と思っていたがやはりそこは違った。写真で見るのと実物を現地で見るのでは当たり前のことだが全く違うのだ。金閣は、境内の参観でお寺の中に入って行くとすこし開けたところ、池があるところに出る。そこに出てみると右手の方にまるで「僕、金閣です」というように金ぴかの建物が主張してくる。まず私はそこに圧倒されてしまった。そのあとの松を船に見立てて作った庭などはおぼろげにしか覚えてない。それくらいインパクトがでかかった。今のインターネットの時代では目の前のパソコンを繋げば、本を開くより簡単に写真が見られるが、やはり実際に行ってみた方がいいだろう。特に金閣寺はそう思った。

さて、次は下賀茂神社だが、事前に研究をしていなかったので、名前しか知らなかった のだが、なんと世界遺産になっていたというのだ。ここで私は自分の幸運に感謝した。そ の下賀茂神社ではみたらし団子の語源みたらし川などを見た。下賀茂神社はホント街中に あり、びっくりした。

さて私が行きたかった慈照寺銀閣は銀閣寺道前でバスを降りて行ったが、色々なお店が 並ぶまるで清水寺道みたいであった。その銀閣の印象はどこかわびしさが感じられた。銀 閣も金閣と同じくらいに観光客がいっぱいいたのだが、何故か銀閣はものすごく静かであ った。私個人としてはインパクトがあったのは金閣だが銀閣の寂しさの方が好きだった。

2日目と3日目の最初に行ったところは友人の担当だったのでそんなに触れるところはなかったと思うが、北野天満宮で宝物殿が公開されていたことは私のテーマに関係あるところなので、特別触れようと思う。その宝物殿は特別公開されていた。また幸運に感謝するのだが、そこには人文学的に価値のあるものばかりあった。その中でも取り上げようと思うのは、北野天満宮の室町時代の文書だ。北野社ではお酒を造るために必要な麹を作っていたのだが、その麹を独占するために幕府に働きかけたり麹を作っているところへ訴訟したりしたのだが、その文書がきちんと残っていたのだ。そこに私は感動した。

さて、次は私の研修について話そうと思うが、3 日目も予定を変えたのだ。その理由は、元々行く予定であった日本三大仏閣の一つ西本願寺飛雲閣が工事をしていて参観できなかったからだ。これから日本文化演習に参加しようと思っている方は二月くらいに事前リサーチをするといいだろう。話は戻るが、本願寺へ行く予定を変えて最初に行ったのは友人の行きたい所の候補であった八坂神社だ。これは友人が触れていると思うので特には触れない。

私が次に行ったのは法然の知恩院だ。行った理由は単純に神社から歩いていける距離と いう事もあったが、有名な雀の泣き声がする廊下や三方どこから見ても正面を向いている 猫などが見たかった。結果から言うとホントに雀の泣き声がしたし、気持ち悪いほどに猫 がこっちを見ていてすごかった。やはり実物を見た方がいいと思った。その後となりにあ った青蓮院に行ったのだが、そこはとても静かで観光客もほとんどいなかった。なにか別 世界のように感じられて行ってよかったと思う。読んでいる方もぜひ行ってほしい。どち らかというとマイナーなところなので話のネタにもなる。そして下世話な話だが、とても コストパフォーマンスがよかった。普通の神社仏閣なら行けないところ(境内の畳など)も多 いが、青蓮院は状態がいいのか基本的にすべての場所に行けるのだ。そこは本当に良いと ころだと思った。次は山県有朋の別荘であった無鄰菴だ。そこは近代式の庭園があり日本 の近代の文化や、無鄰菴会議の場所となった歴史の動いた場所が見られた。ここもまた静 かな場所でよかったが、庭園が全部静かとなるとなぜか面白く感じる。私のテーマには関 係ないので続かない話題だが、閑話休題。さて最後に行ったのは南禅寺だ。南禅寺では明 治時代にできた水路閣や境内が印象に残ったが、一番残ったのはやはり山門である。私は 高所恐怖症というほどではないが高いところが苦手だ。その山門も例にもれずにものすご く高く、私は絶景を見ながら絶叫してしまったほどインパクトがあった。これで終わりだ が、次に京都へ行くことがあったら事前リサーチを欠かさないことが必要だろう。

京都を歩いて

2 部日本文化学科 2 年 2813122 新庄 良浩

「百聞は一見にしかず」ということわざを知っているだろう。どんなに話を聞いても、 一度自分の目で見ないことにはわからないことがある。今回の日本文化演習を一言で表す のにこれ以上にふさわしい言葉はないと、私はそう思っている。ここでは、私が京都の街 で感じたことを書いていこうと思う。

私の記憶に特に印象に残っているのは、金閣寺と銀閣寺、それに青蓮院という場所である。訪れた順に述べることにする。まず、私は自主研修の1日目に金閣寺と銀閣寺を見に行った。正直、私はこの2つにはあまり期待していなかった。金閣寺は学校の教科書に載っているのを見たことがあるし、友人から話を聞いていて、無理に行く必要もないだろうといった心持だった。ただの金色の寺になぜそこまで人々が行きたがるのかといった気分だったのだが、実物を見るというのは写真などで見るのとはまったく異なる感覚を得ることができるようである。入山料を払い、中へ入ると見えてきたのは金色に輝く寺。これが金閣寺だと一目で理解することができた。乗り気でなかった私も、思わず感動させられた。それは想像を大きく上回るものだった。金閣寺自体ももちろんそうだが、それを囲む庭園もまた風景を際立たせていて、それはもう、見事の一言だった。ただ、有名観光名所であるだけに日本の他、外国からの観光客もかなり多く、落ち着いて周ることができないのは残念である。個人的に気に入ったのは「陸舟の松」という松の木で舟を表したものである。金閣寺は金色の寺があるだけだと思っていたが、それだけではなく、庭園としても見所があり、一度自分の目で見ておくべき場所だと思えた。

次に訪れたのは銀閣寺である。さて、銀閣寺というものにはどんなイメージを持つだろうか。私は正直に言うと、銀閣寺というのは金閣寺の下位互換といったイメージを持っていた。銀色の寺があるわけでもなく、そこらへんのものと大差のないという少し失礼なことを書いてしまうが、やはり地味というイメージが今まで授業や写真を聞いたり見たりしてきた中で生まれ、それが焼きついていた。バスを降り、「哲学の道」という道を歩いていくと銀閣寺への上り坂が見えてくる。「哲学の道」は川沿いに作られた道で、何かあるわけではないが、シンプルで、川の流れる音を楽しめ、景色もよかった。「哲学の道」を進むと、銀閣寺への道に変わっていく。金閣寺にはなかったのが、銀閣寺に行くための上り坂にあるお土産屋の数々である。これがあるのとないのとでは大きな差があるということを私は感じた。この店を見ているだけでも十分楽しむことができ、京都の名物を楽しむことも可能という、これこそ観光名所といった印象を受けた。肝心の銀閣寺の方も、金閣寺のようなインパクトはなかったが、質素な造りがどこか心落ち着くような感覚となり、眺めているだけで安心する場所だった。時間帯が良かったのか人もあまり多くなく、見て周るのにも苦ではなかった。金閣寺と銀閣寺の2箇所を訪れるだけでも十分京都を満喫した気分になれてしまうほど思い出に残る場所だった。

思い出に残るといえばもう1つ印象的な場所があった。大して目立つわけでもなく、観光地として有名なわけでもないが、有名でないからこそいいものもあるということを実感させられる場所がそこにはあった。そこが青蓮院という場所だった。知恩院の近くにあるその場所は自然に囲まれていて、車通りも少なく、騒音がない。それだけでもとても落ち着くというものだが、整えられた庭園と水の流れる音、風に揺られる木の葉も有り、目も心も休まる。いろんな観光名所を訪れた後にここに来ると、人ごみなどによるストレスを忘れることができた。設備の点でも文句はなかった。他の観光地では立ち入り禁止のスポットが多く、肝心のものが非常に見えにくいことがよくあった。だが、この場所は違った。基本的に立ち入り禁止になることの多い畳エリアや仏壇の部屋なども、国宝のある間以外のほとんどの場所に出入りすることが可能だった。特に縁側から見る景色は絶景で、時間が許すのならしばらくはそこでゆっくりと眺めていたくなるほどいいものだった。この場所は本来訪れる予定ではなく、たまたま気まぐれで入っただけだったのだが、これほどまでに心に残るとは思いもしなかった。好奇心というものに従い、なんとなくというのも悪くはないものだと今回そう思うことができた。

今回、私は日本文化演習に参加することには不安しかなかった。テーマを決め、そのテ ーマを踏まえて各地を巡るということが私にできるのかという気持ちでいっぱいだったか らである。自分も一応テーマを立て、それに従い行動しようという目安はあった。しかし、 どう考えても一人で調査し、考察するには難易度が高いのではないかという念に駆られ、 案の定、簡単ではなく調査は思うようにいかなかった。その結果、このレポートに書く予 定だったものは資料も情報も不足し別の機会になってしまった。だが、1 つダメになって も取り返しがつくのが京都という都市なのだということを実感することができた。今回は 「百聞は一見にしかず」をテーマに金閣寺と銀閣寺の思い出を書き、その後、印象に残っ たことを書くということになってしまったが、後悔はない。結果として1つ大きな教訓を 得ることになったのだから。無理にテーマを考えず、まずは京都という街を楽しみ、そこ から本当に興味のあるものを見つけ出すというのもまた1つの研究、探求の始まり方とい うのも悪くはないのかもしれない。次に日本文化演習に行く人に出会ったとしたら、自分 にとって楽しいものになるような旅行になればいいというアドバイスを送ることにしよう。 これで今回の私のレポートは終わりにしようと思う。もう一度今回の日本文化演習の感 想を書かせてもらうが、「百聞は一見にしかず」ということと、好奇心に素直になるという こと。当たり前のことと思うかもしれないが、このことは長い人生で忘れてはいけないこ

とだと最後に述べておくことにする。楽しい旅行だった。

なぜスイーツがこんなにも

2 部日本文化学科 2 年 2813123 鈴木 涼太

京都と言えば歴史が深いというイメージがあるだろう。何かを調べるという事になればやはり、歴史上の出来事があった場所や背景、妖怪や怪物、偉人等の伝説伝承という所に興味を惹かれてしまうのは至極当然のことであると思う。が、忘れてはいないだろうか。今や京都は神社仏閣や建造物のみならず、"スイーツ"も観光客が目当てとするまでに成長しているのである。"スイーツ"とはデザート、つまり "甘味"である。甘味と聞くと和菓子を思い出してしまうが、今や京都が誇るスイーツとして観光雑誌に取り上げられているものは、宇治抹茶を前面に押し出した菓子や、チョコレート、ゼリー、パフェ等まさに現代の"スイーツ"と呼ばれるにふさわしい甘味達であり、それらは所狭しと雑誌から魅力を醸し出し、私たち観光客を誘惑し続けているのである。そこで一つ疑問が浮かぶ。なぜ京都にこれほどまでに甘味処が集中しているのだろうか。また、なぜ歴史的建造物と並ぶほど前面に押し出されているのだろうか。その疑問はインターネットで調べてみてもわからなかった。そこで、今回の研修旅行では、元祖スイーツの「抹茶」・「あんこ」・「みたらし団子」を代表として取り上げ、それぞれの発祥の地をめぐり、その秘密に迫ることをテーマにする。

京都、甘味、と聞いて多くの人は抹茶スイーツを連想するのではないだろうか。抹茶パ フェ、抹茶ケーキ等々。その「抹茶」の発祥を調べる為には宇治へ行く必要があった。宇 治にはあの硬貨や一万円札に書いてある鳳凰で有名な平等院の鳳凰堂、最古の神社とされ る宇治上神社、『源氏物語』を題材にした源氏物語ミュージアム等があり抹茶以外でもとて も魅力的な町である。そんな宇治に抹茶が伝わったのが鎌倉時代。僧・明恵によって伝え られたとされる。その後、名茶園ができ水が湧いたことや、織田信長、豊臣秀吉らの庇護 を受けた事により宇治はお茶の産地として名声を獲得していくのである。お茶の街という だけあり、平等院へ向かう参道にもお茶屋さんがいたるところにあった。さらにいうなら 宇治駅を降りてすぐの郵便ポストがもうお茶。とにかくお茶なのだ。ここでは上記の観光 名所も合わせて回った。平等院の入口にあるお茶屋さんで、有名な抹茶ソフトを食べた。 もちもちとした抹茶のアイスに更に粉の抹茶を振りかけるという贅沢な一品である。しか し、私は抹茶が苦手なのだ。大好きな人であればきっと素晴らしい商品であるはずなので、 是非試してみてほしい。更に私は福寿園が経営するカフェにも立ち寄った。福寿園は初代 創業者伊右衛門でおなじみ。そう、あのお茶の伊右衛門は彼の名前から来ている事はご存 じだろうか。そこでは玉露セットを頼んだ。正しい飲み方で玉露を飲む機会などそうそう 無い。ワインのコルク程も無い高さの入れ物に濃縮された玉露のエキスを入れ、飲む。知 っているお茶ではなく、その味には旨味があった。濃厚な一杯であった。

宇治を後にして、続いて「あんこ」発祥の地とされる京都嵐山の小倉山へと向かった。 有名な小倉あんの発祥地である。小倉あんは 809 年頃空海が中国より持ち帰って小倉山で 栽培されたそうだ。その嵐山にある二尊寺ではそれを記念して無料のぜんざいを配るイベ ント等を行っている様だ。その取材の為嵐山に着いた時にはもう二尊寺は閉まっていた。 そう、私は宇治で時間を取り過ぎたのだ。途方に暮れ駅に向かう私の目に飛び込んできた のは湯豆腐の文字。迷わず入店し、豆腐のコースを一つ注文。前日までテレビの取材が入 り休業していたとのこと。そのせいもあっていつもより多めに豆腐をサービスしてくれた ようで、まぁ、入らない。1人前を超過しているのだ。なぜいけると言ってしまったのか。 しかし女将さんはとても優しく残ってしまったおかずとご飯を(ご飯は追加しておにぎり にしてくれた)持ち帰りにしてくれた。帰り際女将さんと少し話をした。どうやら北海道 が好きらしい。こちらから好んで京都へ行くように、京都の人は北海道が好きな人が結構 多いらしい。

さて、本題に戻るが、最後は「みたらし団子」である。これは下鴨神社にある御手洗川と言うところがその発祥とされている。土用の丑の日が近付くとこんこんと水が湧き出る御手洗川は京都七不思議の一つとされていて、そのこんこんと湧き出る様子を表したのがみたらし団子である。正直さっぱり分からなかったのだが、近くのお団子屋さんでみたらし団子をしっかりと食べた。よく見る大きいお団子ではなく、小さい丸がぽつぽつある様な隙間も開いている団子である。3本食べてもおなかが膨れるかどうか怪しいほどである。

以上が元祖スイーツの発祥である。番外編としては右側通行である事を意識しなければならない場面に遭遇したり、北海道と違いほとんどのお店が早く閉まってしまうという事に驚かされたりした。他にもさまざま観光をしてきた。千本鳥居でおなじみの伏見稲荷大社ではふもとのソフトクリーム屋さんでとうふミルクソフトを食べたり、錦市場で出し巻き卵を食べたり、有名な喫茶店でカラフルなゼリーポンチを食べたりなど。どれもこれも北海道では珍しかったり、同じものでも味付けが違ったりして面白い。

2日目に晴明神社へ寄ってから発熱して半日を潰したり、臨時休業によく遭遇したりし たのは、普段の行いが悪いせいなのだろうか。それにしても、どこに行くにも京都はとに かく歩く。目的地の入口には辿り着くが本殿にはなかなか着かないことも多く、伏見稲荷 大社に至っては山頂まで軽く40分はある。そこでひとつ、私の結論なのだが、甘味処がこ れほどまでに発展した背景にはこの"歩く"ということが関係しているのではないか。単 純に考えると、歩くと喉が渇く、喉が渇くという事は潤す物が必要になるのである。つま りお茶である。更に、長時間の移動による疲労、それも大昔ならなおさら体力を使っただ ろう。そんな時人は糖分を欲するのである。疲れて喉が渇き、目的地の途中で休憩処を見 つけた旅人はそこで休みお茶を飲む。そして糖分を求めて甘味を頼むだろう。実際伏見稲 荷大社には、ところどころに休憩所とされる甘味処が多数存在している。心が折れそうな 時に絶妙なタイミングでそれらが現れるのである。つまり、京都のスイーツは発展するべ くして発展したのではないだろうか。「抹茶」、「あんこ」、「みたらし団子」等の甘味が揃っ ていた事、そして、旅人と商人の需要と供給が合致した結果が現代の京都スイーツへと受 け継がれているのである。こうしてインターネットで調べるだけではわからない事につい て、直接触れ、自分で考え、一つの結論を導き出せた今回の研修は、本当に参加した価値 があったと思う。が、まだまだ調べ足りない事が山ほどあるのもまた事実である。

日本文化研修旅行レポート

1部日本文化学科 2年 2713154 高市 涼太

まず、1日目の2月23日は、高野山の奥之院を現地ガイドの案内のもと見て回った、奥之院の本堂へは墓所を通って行ったのだが、その墓所には、歴史の教科書に名前が出てくるような人物のお墓や、シロアリのお墓と言った、他の墓所では見られないようなお墓まであり、とても面白かった、本堂では、地下に手のひらに乗るくらいの大きさの小さな仏像がたくさん並べられており、奥に進むと、空海の絵と大きな仏具が置かれていて、現地ガイドに正しい仏具の扱い方などを教わった。バスに戻る道中では、宮内庁管理の皇族のお墓についての事など、現地の人しか知らないような、とても貴重な話を聞くことができた。また、1日目の宿泊場所は高野山内の普賢院と言う所で、夕食が精進料理だった。精進料理はほとんど味がないと思っていたのだが、予想に反してとてもおいしい味付けで、精進料理のイメージが変わった。

2日目は、普賢院で朝のお勤めをして、普賢院の本堂や真言宗について話を聞いたのだが、 その中でも、曼荼羅についての話にとても興味を抱いた。曼荼羅は実物を見たことが無く、 思っていたより大きくてとても荘厳で驚いた。それから、高野山内の壇上伽藍と金剛峯寺 を見て回ってから高野山を降り、飛鳥寺に行った。飛鳥寺は日本で1番最初の寺であり、 飛鳥寺の方の話によると、中の仏像も日本最古の物らしく、その仏像を前にして、今見て いる仏像をはるか昔の日本人も見ていたと思うと、とても不思議な心持になった。また、 その仏像は、正面を向いていなくて少し斜めになっていて、その理由としては、ちょうど その仏像の向いている先に聖徳太子の住んでいる場所があったからとされている。また、 その仏像は、平安、鎌倉時代に火事に遭っているのだが、仏像本体は軽い傷だけで済んで いるらしく、これはただの偶然ではないなと感じた。次に、天理教本部に向かったのだが、 まず、天理市に入った段階でとても驚いた。天理市と言う名前から天理教と関係があるの はわかっていたが、市全体が天理教と言っても過言ではないような街並みで、天理教本部 に着く前から、天理教の様子を知ることができた。天理教本部に着いてから、本部の中を 天理教の方に案内してもらったのだが、とても大きな施設で、天理教と言う宗教がとても 大きな宗教だということを改めて感じさせられた。天理教について、名前しか知らず、ど のような宗教で何を信仰しているのか、と言うことは全く知らなかったので、天理教の方 の話を聞く事が出来てとても自分の為になった。

3日目は、午前中に京都御所の参観をしたのだが、とても広くて、当時のままで残っていて、とても綺麗だった。ガイドの方の話の中にも所々知っているところがあって、とても面白かった。立ち入る事の出来ない所も入ってじっくり見たいと思った。午後からはグループ研修で、私のグループは幕末に関連するところを巡る事にしていたので、幕府、新撰組、坂本龍馬、この3つに縁のあるところに行くことになっていた。なので、まずは京都御所から近いということで、二条城に行った。二条城は、徳川家康が将軍になった際の賀

儀と、徳川慶喜の大政奉還が行われた場所で、徳川幕府の始まりと終わりの場所と高校時代に習っていて、とても行きたいと思っていたので、今回行くことができて本当によかった。まず、二の丸の中に入ったのだが、徳川慶喜が大政奉還している場面が、人形によって再現されている一室がとても印象に残っている。日本史の教科書に載っていた大政奉還の絵から、広い部屋で行われていたかと思っていたが、思っていたよりも狭い部屋で行われていて驚いた。また、その部屋の横には、隠し部屋があって、もしもの時に備えて武士が装備を整えて待機していたらしく、自分の知らなかったことなので、とても感動した。

4日目は、新撰組の所縁の地と言うことで、新撰組が、武芸の訓練などをしていた、壬生寺と言う寺に行った。武芸の訓練と聞くと、とても緊張感のある所を想像するが、壬生寺にあった資料館では、新撰組は、壬生寺内で近所の子供たちと遊んだり、狂言や相撲をしたりして、訓練の合間の息抜きもしていたことがわかり、常に緊張感があった訳では無く、ほのぼのとした雰囲気のひと時も過ごしていたということが分かった。彼らは日本史の教科書などでしか見たことが無い人物なので、とても同じ人間として思えなかったのだが、このような、人間味溢れる一面が覗けると、親近感が湧く。また、壬生寺には、新撰組隊士の顕彰碑があり、今でも、池田屋騒動があった日の7月16日には、慰霊供養祭をおこなっているらしい。そして、驚くべきことに、新撰組隊士の顕彰碑の横には、歌人の柿本人麻呂の墓もあったのだ。これには、新撰組の隊士も驚かずにはいられなかったであろう。

5日目は、坂本龍馬の墓を見に行った。坂本龍馬の墓は護国神社にあり、龍馬の他にも中岡慎太郎や桂小五郎などの墓もあって、当時、国のために命を懸けて戦った者たちと墓越しに対面して、とても良い体験ができた。また、この護国神社の近くには、坂本龍馬を含め、幕末に活躍した人たちの事がわかる霊山歴史館があり、中には、坂本龍馬を斬ったとされる刀や、実際に触る事の出来る鉄砲や大砲の弾があり、とても充実した時間を過ごすことができた。1時間弱滞在したのだが、スケジュールに余裕があればもう少し居たかったと今になって思う。

この研修を通して、日本史に関しての知識を得る事ももちろんできたのだが、それ以上に、実際に出来事が起きた場所や、使われた物を見ることで、今まで以上に日本史に興味を抱くことができた。また近いうちに京都に行って、今回の研修旅行では行けなかった場所に行き、また日本史に関しての面白みを感じたいと思う。また、京都の歴史的な建造物などを見ると、やはりこれらの歴史的価値のある物は、今までも残してきたように、これからもずっと残していかなくてはならないものだと思った。このレポートには詳しく書いていないが、幕末の建造物以外にも清水寺や本願寺など、目的地に近くて歴史の長い建造物にも行ったのだが、やはりどれも素晴らしく、5泊6日では時間が足りなかった。

京都文化の伝達

1部日本文化学科 3年 2712195 田中 梨乃

私が所属していた班は班員がそれぞれ異なる目的を持ち、各々その目的の為に行動するいわば単独行動班であった。その為、周る場所やルート等何から何まで自分で調べて決めなくてはならなかったが、それは同時に周囲に行動を制約されない利点があった。そこで私は事前学習で決めたテーマに拘らず、色々な所を見てきた。私が当初のテーマとしていたことは京都の神社や寺院についてであったが、そこを中心として他の施設も周っていくうちに新たに学習したいことが出て来た。それは京都はかの土地が持つ文化をどのように保存し、かつ広めているのか、ということであった。ここで私が日本文化演習で学んだ京都文化の保存と伝達の仕方の一部を紹介しようと思う。

○京都の歩かせ方

当たり前のことながら日本には四季があり、同じ場所でも季節が違えば、その場所の新たな一面が垣間見られる。公益社団法人京都市観光協会が主催するディスティネーションキャンペーン(JR グループ 6 社と地方自治体や地方の観光事業者が協同で行う大型観光キャンペーンのこと)では「京の冬の旅」が企画されていた。実際に内容を見た所、初詣で七福神を祀る神社や寺院を巡るコースや春の訪れを象徴する梅の名所を巡るコース、様々な場所のお雛さまを見て周るコース等、時期に合わせた企画が紹介されていた。また、時期が同じでも、私たちが各自で演習のテーマやそれを果たす為の旅行の計画を立てたように、旅の中で"何が見たいのか"が違えば、それぞれ違う旅になるだろう。私は演習中には行けなかったが、JR西日本の「歴史たび」のパンフレットでは平等院鳳凰堂を巡るガイドツアーが紹介されていた。そこへ行く為には電車を利用する人も多いのだろうから、おそらくその客をターゲットにしていると思われる。しかしJRが平等院鳳凰堂だけにスポットライトを当てるとはきめ細かいと思った。京都の観光業界は同じ場所でも時期毎に異なる顔を見せ、新たな発見をさせることに工夫を重ねていることがわかった。

また、京都ではツアーだけではなく、自分の足で歩いて学んで貰う為の工夫も見られた。 例えば、祇園の商店街ではスタンプラリーを集めて周ることで、寺社で開かれるお茶会に 参加出来るという企画があった。また、着物を着ているとお店での買い物や特定の施設へ の入場で割引等のサービスを受けられるという企画もあり、いずれもただ場所を周るだけ ではなく、実際にお茶会に参加したり、着物を着てみたりすることで更に京都文化への接 触を促す試みであると見受けられた。

○京都文化を伝えるのはやはり「人」である

京都観光には外国語の案内が欠かせないものとなっている。私が訪れた神社や寺院にも 少なくとも英語表記のパンフレットや看板はおいてあったし、京都文化博物館に置いてあ ったパンフレットは英語、中国語、韓国語の表記に分かれていた。ここまでは、何処でも やっているとまではいかなくとも、予想は出来たことであった。私は博物館の他に図書館 にも立ち寄ってみた。すると「京都を英語で紹介する」と書かれたプリントが置いてあっ た。これはパスファインダーと呼ばれるテーマに関連する資料をまとめた資料であった。 なるほど、京都の文化を伝える為には地元の人々に一定の教育を施すことも必要なのだと 思われた。

では、そういった教育には他にどういうものがあるのか。図書館のパスファインダーには他に「京都市街の古地図をたのしむ」というテーマのものもあった。図書館には古地図そのものは無かったようだが、複製した地図が見られる資料が紹介されていた。このように市民が興味をそそられそうなテーマを設定し、そこから京都に関する学習へ導入していく試みはなかなか素晴らしいと思った。それから京都市役所を訪ねてみると、「京まなびパスポート」というものが置かれていた。これは市内で出来る講座や地域活動等に参加し、その時の記録を記入していく為のものである。記入ページは全部で100ページあり、全て埋めて教育委員会の事務局に送れば、認定証が受け取れるのである。やはり京都はこうした生涯学習の普及にも力を入れていると見える。

また、京都は平成 13 年度から、春分の日を「伝統産業の日」と定めている。この日を中心に京都では、茶の湯や着物、伝統工芸等、様々な京都文化を広めるイベントが行われている。この「伝統産業の日」は京都の 1200 年の歴史の中で培われた「匠の技」を国内外に広めることが目的であるとされており、京都の文化を後代にまで伝えてきたのは結局「人」の力であったことを再認識出来る機会になり得ている。

日本文化演習を終えて

~京都の神社を巡る~

1部日本文化学科 2年 2713161 谷 なつみ

今回の日本文化演習では、団体研修で高野山や飛鳥寺、天理教本部、京都御所を、グループ研修で北野天満宮や貴船神社、伏見稲荷大社などを訪れた。団体研修ではガイドの方の話を聞きながら見てまわり、貴重な体験ができた。グループ研修では京都の神社を中心に見てまわった。そのなかで、特に印象深く残っている場所として北野天満宮・貴船神社・晴明神社・伏見稲荷大社・八坂神社について紹介しようと思う。

北野天満宮は菅原道真をまつり、学問の神様として有名であり信仰のあつい神社である。ここでは、毎月 25 日に縁日が開かれている。偶然にも私が訪れたのは 25 日であり、また、梅を愛した祭神・道真公の命日に梅を愛でて偲ぶ梅花祭もこの日であったため、多くの参拝者でにぎわっていた。ちょうど見ごろであった梅を見ようと梅苑には長蛇の列ができていた。梅苑以外にも境内には多くの梅の花が咲いており、参拝をしながら綺麗な梅の花を楽しむことができた。祭神である菅原道真は無実の罪で配流され亡くなった。その死後、京で異変が相次ぎ、それらは道真の祟りとして恐れられた。その祟りを鎮めるためにこの北野天満宮は建立された。怨霊として恐れられた道真だが、その生前は学問などにとても優れていたことから、後に学問の神として信仰されるようになった。また、道真と関わりの深い動物として、牛の像が多数見られた。学問の神様ということで、受験生であろう学生もちらほら見られた。私も受験生の時に北野天満宮の御守りをもらっていたので、懐かしく感じた。

次に貴船神社について紹介する。貴船神社は水の神様、雨乞いの神様として信仰されている。山の中にあり、近くには貴船川が流れており、自然がいっぱいの場所であった。本宮前の二の鳥居は登っていくのは少し大変であったが、とても幻想的で感動した。ここは本宮・結社・奥宮からなり、結社は縁結びの神様として信仰されている。結社は平安時代の女流歌人・和泉式部が切ない心情を歌に託して祈願したという話で有名である。社の近くには和泉式部の歌碑がみられた。和泉式部は夫との仲がうまくいかなくなってお参りをし、切ない心情を歌に託して祈願したところ、社殿の中から慰めの返歌が聞こえて、ほどなく願いが叶い夫婦仲がもとのように円満にもどったという。その時に和泉式部が詠んだ歌は、「ものおもへば沢の蛍もわが身よりあくがれいづる魂かとぞみる(あれこれと思い悩んでここまで来ますと、蛍が貴船川一面に飛んでいます。そのはかない光は、まるで自分の魂が体からぬけ出して飛んでいるようでございます。)」というもので、神様の返歌は「おく山にたぎりて落つる滝つ瀬の玉ちるばかりものな思ひそ(しぶきをあげて飛び散る奥山の滝の水玉のように〈魂がぬけ出て飛び散り消えていく=死ぬかと思うほど〉そんなに深く考えなさるなよ。)」というものである。また、結社では願いごとをしたためた「結び文」

を結び合わせて祈願するとよいということで、多くの結び文が結ばれていた。貴船神社の おみくじは特徴的で、神水に浸すと文字が現れる水占みくじというおみくじである。水の 神様をまつる貴船神社らしいおみくじだなと感じた。

晴明神社は平安時代中期の天文学者である安倍晴明を祀っている神社である。安倍晴明は朱雀・村上・冷泉・円融・花山・一条の六代の天皇に仕えた。また、陰陽師としての活躍は有名である。そのため、陰陽道の象徴である五芒星が多く見られた。境内には晴明が自身の式神 12 体を封じ込めたとされている一条戻橋の再現や式神の石像、自身の厄を撫で付けるとよいとされている厄除桃、晴明の数々の伝説のうち代表的な 10 の逸話を紹介している顕彰板などがあった。顕彰板は絵が付いており、わかりやすいものであった。私の知らなかった話もあったため、少しの間見入っていた。

伏見稲荷大社は全国の稲荷神社の総本社であり、商売繁盛・家内安全などの神として崇められている。真っ赤な千本鳥居が立ち並んでいる様がとても印象的で、綺麗であった。境内には稲荷大神様のお使いということでキツネの像が多くみられた。また、絵馬も白狐の絵馬であった。千本鳥居を越えた先には、持ち上げたときに軽いと感じると願いが叶うと伝わる「おもかる石」があった。実際に持ち上げてみたが、重く感じたので少し残念である。今回は行けなかったのだが、稲荷山を巡るお山めぐりコースがあり、塚や祠を見てまわることができる。門前には稲荷寿司を売っているお店が多くみられた。

最後に八坂神社について紹介する。八坂神社は厄除け・商売繁盛の神として信仰されており、日本三大祭のひとつである祇園祭は八坂神社の祭礼である。祇園祭は京の町を疫病の災害からから守るために発祥し受け継がれている祭礼である。八坂神社にまつられているのは、一度は聞いたことがあるだろう素戔嗚尊・櫛稲田姫命・八柱の御子神である。素戔嗚尊は八俣大蛇を退治して櫛稲田姫命を救い地上に幸いをもたした偉大な神で、天照大神の弟神である。また、境内には美御前社という社があった。この社は名前の通り、美を象徴する神として祭られている。古くから祇園の芸妓さん舞妓さんをはじめ美しくなりたいと願う女性などから信仰されている。八坂神社にこのような社があることは知らなかったので驚いた。美の象徴ということで、女性が多く立ち寄っていた。多くの人で賑わう祇園付近にあるということもあり、参拝者も多くみられた。通りに面した西楼門がとても華やかで目立っていた。

今回の研修では神社を中心に訪れたが、移動の途中にもいろいろな観光地や博物館など 訪れてみたいところがあったので、また京都へ行く機会があれば、次は神社以外の場所も 巡ってみたいと思った。団体研修や2日間と半日のグループ研修では紹介した以外にもた くさんの場所を訪れることができたので、私にとってこの日本文化演習はとても良い研修 になった。今回の貴重な体験や多くの経験を今後の勉強に活かしていきたいと思う。

陰陽師と怨霊について

1 部日本文化学科 2 年 2713165 手嶋 由依

私は今回の研修で陰陽師と怨霊に纏わる場所を巡ってきた。本や映画等でよく題材となっている陰陽師、そして怨霊はどのようなものだったのか、などといったことを自らの目で見たことを頼りに想像し知識を深めたいと考えたためである。多くの場所を訪れることができたが今回はそのうちの4か所に絞り論じていく。

まず初めに怨霊に纏わる場所について論じていく。このテーマでは北野天満宮について取り上げる。この場所は菅原道真が主神である。彼は無実の罪で配流された後に大宰府で亡くなったが、その後、落雷等の災害が相次いで起こった。そこで、それらは怨霊となった彼の仕業だと考えた朝廷は左遷を撤回。正二位という位を与えた。そしてその数年後、託宣がありそれに基づいて建てられたのが彼を祀る社殿であるとされている。自らの足で赴き感じたことは第一にとても立派だな、ということである。当日は梅花祭りが行われていたこともあり人が多く、細かく見ることは出来なかったが、思わず圧倒されてしまうほどの社殿の存在感や美しく配置された梅の木々が印象的だった。人々は彼のことをとても恐れ、彼に安らかに眠ってほしいという願いが現代にも受け継がれているのだな、と感じた。また、道真の遠い祖先の神である天穂日命、祖父の菅原清公、父の菅原是善など彼の親族も祀られていた。これは当時の「一族」に重点を置く考え方が反映されているのかな、と思った。

次に陰陽師に纏わる場所について論じていく。このテーマでは晴明神社、幸神社、仁和 寺について取り上げる。まず初めに晴明神社について論じていく。この場所は安倍晴明と いう優れた陰陽師を祀る神社で、彼の屋敷跡に建てられたとされている。境内には晴明が 一条戻り橋の下に式神を封じていたという伝説から、実際に使用されていた欄干親柱を用 いた橋や奉納された式神の置物などがあり、とても興味を引かれた。また、桃をモチーフ にしたお守りや厄除桃と呼ばれる桃の銅像があるなど、桃が重要なものの一つとして扱わ れていた。これは、桃には魔除・厄除けの効果があるとされているためである。昔話の『桃 太郎』で桃太郎が桃から生まれてくるのもそれが理由であると考えられている。加えて境 内には晴明の伝説が書かれたパネルが複数飾られており、観光客に優しい造りとなってい た。私は中でも公卿達に蛙を殺すよう頼まれ術を使って蛙を潰したというエピソードが印 象に残っている。自らの目で見て感じたのは、晴明桔梗と呼ばれる五芒星のマークが鳥居 や井戸などいたるところに用いられているため、どこか現代的な雰囲気がするということ である。様々な図形が見られるため、日本にいながらどこか他の国に来たような感じがし た。また、境内がとても整備されていることや平日の遅い時間に行ったのにも関わらず多 くの人で賑わっていたことから、彼の死から千年ほど経った今でも多くの人から愛され、 尊敬されているのだなと思った。

次に幸神社について論じていく。幸神社は京都の町の北東方向に延びる鬼門の封印の

一つである。北東方向が鬼門とされている理由は、陰陽道では北と西は陰、南と東は陽とされており、北東と南西は陰と陽の境目になってしまうので不安定になってしまうからといわれている。そのため、南西の方向は裏鬼門とされ、鬼門と同様によくないものである。この幸神社の祭神は日本最古の縁結びの神である猿田彦の大神を主神としている。天武天皇の白鳳元年(661)に再興され、平安京創設時(794)に桓武天皇によって鬼門除けの守護神として建てられたものである。また、稚児・巫女として出雲の阿国が仕えていたため、芸能上達の御利益もあるとされている。主神の影響か境内には猿の細工や絵馬が見られた。実際に行ってみると、出雲の阿国に所縁があると聞き大きな神社を想像していたが、住宅地の中にポツンとあったため初めは驚き戸惑った。しかし、絵馬が多くあったことや境内が綺麗に整っていたことから、この神社は地元の人々から愛されている神社なのかなと思った。また、なぜ縁結びの神様が鬼門封じに使われているのかが気になった。

次に仁和寺について論じていく。仁和寺という名前は建てられた年号からきている。こ のお寺は鬼門とは逆の北西方向に延びる神門のライン上に建てられたものの一つで、幸神 社とは逆の辺りに位置する。この仁和寺は世界遺産に登録されており、真言宗御室派の総 本山でもある。また、明治維新までの約 1000 年間、代々皇室から住職を迎えていた門跡寺 院の一つで、皇室と所縁が深いことでも知られている。当日は偶然にも非公開文化財であ る金堂と経蔵が一般公開されており、とても良い経験になった。真言宗御室派の総本山と あってか中はとても広く、豊かな緑がとても美しかった。また、時期的に咲いてはいなか ったが桜の木が多く植えられており、春には美しい光景が広がるのだろうなと思った。鬼 門にある幸神社と神門にある仁和寺を比べて感じたのは、やはり神門には立派なお寺が建 てられるのだな、ということである。神聖な土地に建てることで神社自体の格も上がり、 得られるものも大きいのかなと考えた。その為、今日まで多くの人達に親しまれ、来訪が あるのではないだろうか。一方鬼門に建てられた幸神社は歴史から考えるともっと多くの 人の来訪があってもおかしくはないのにも関わらず、住宅地の中にひっそりと佇んでいる のは、現代を生きる我々には鬼門というものが身近ではなくなってしまったためではない かと考える。鬼門を封じ守ってくださっていることの有難みが実感できないため段々蔑ろ にするようになり、このように差が開いていったのではないだろうか。

今回の研修で感じたことは鬼門、神門についてはどの町においても延びている方向は同じなので、今後地図を見る際にはそのような視点で見るもの面白いかもしれないなと感じた。また、その場所によって植えられている木が違うので、そういった木にも意味があるのかどうかについて個人的に調べてみたいなと思った。また、怨霊については、今まで教科書でしか学んだことのなかった場所に実際に行き歴史を感じることで、より知識が自身のものとなったと思うので、とても良い経験ができてためになった。

以上が私の研修についてのレポートである。

研修旅行を終えて

~神社の動物たちを探す~

1部日本文化学科 2年2713166 戸間替 美紅

今回、日本文化演習に参加し、多くの貴重な体験をすることができた。

まず、一日目から二日目にかけての高野山では、宿坊である普賢院に泊まるという、個人ではなかなかできないであろう体験ができた。そして、人生で初めての精進料理を食べることもできたので、とても満足だった。朝のお勤めは、なんともいえない独特の雰囲気で、普段では感じないお寺の「宗教」の部分を強く感じ取れたように思う。また、北海道では見ることのできないたくさんの変わった墓石をみることができて、とても興味深かった。また、石廟や豊臣家墓所などがあったことにはとても驚かされた。そして、巨大な石の運搬や組み立ての方法、供えてある杉についてなど、様々なことをガイドさんから教えていただき、有意義に過ごすことができた。個人的には、高野山の開創 1200 年記念のキャラクター「こうやくん」がとても気に入った。普段、お寺は法事でしか行ったことがなかったので、「宗教」や「文化」、「歴史」といった面から体験することができ、良い勉強になった。今まであまりお寺に興味を持ったことがなかったのだが、今回貴重な体験ができたので、これからはもう少し勉強してみようと感じた。

また三日目に行った京都御所も興味深かった。私は、去年の秋の一般公開で一度だが京都御所を見学したことがあるので、2度目の見学となった。一般公開では無かったガイドがあったので、それぞれの部屋では何が行われていたのかなどを知ることができ、より理解が深まった。私は今回襖絵に興味を持っていたのだが、閉め切られていた部屋も多く、見られないところもあったのは残念だった。しかし、御池庭などで梅が咲いていて、春らしさを感じられたのはうれしく思った。京都御所は平安時代当時と全く同じわけではないが、やはり当時の面影を多く残しているので、平安時代について興味を持っている私にとっては、とても重要な場所であると思う。そのため、しっかりと勉強してからもう一度行きたいと思った。

また、三日目からのグループ学習では、「神社の動物たち」をテーマにして、動物の像などがある神社を主にして、色々と回っていった。神社ごとに関係のある動物の像や絵だったり、おみくじだったり、様々な動物がいた。

一番印象に残った護王神社は、狛猪や像など猪で埋め尽くされており、今回のテーマに ぴったりとあてはまる神社で、猪がいる理由もしっかりと書かれていた。和気清麻呂公と 姉の和気広虫姫を主祭神としている。この神社には、「奈良時代、道鏡が絶大な権力を振る っていた時代、清麻呂は道鏡の「天皇になる」という野望をくじき、皇室を守るが、道鏡 によって、足の腱を切られ、流罪にされ、刺客まで向けられてしまう。清麻呂はご神託を くれた大神に感謝するために宇佐八幡に立ち寄ることにしたが、豊前国に至ると三百頭も の猪がどこからか現れて、刺客たちから守りながら十里の道のりを道案内してくれた。」という伝説があり、そこから猪がたくさん飾られているようだ。また、猪が去った後、清麻 呂の足の痛みが消え、歩けるようになっていた、ということから、この神社は足腰の健康 で有名である。

また、北野天満宮は梅花祭の日で、多くの梅の花が咲いていた。宝物殿では、日本地図鏡や太刀などを見ることができた。また、北野天満宮に多くの牛の像があるのは、「道真の生まれ年が丑年である」など、菅原道真と牛には深い縁があるといわれているためである。このように、特定の人物と動物の縁があるという点では、護王神社の清麻呂と猪の縁と類似していると考えられる。

岡崎神社では、うさぎが御祭神の神使とされ、狛うさぎなどが置かれていて、例えば阿 吽のうさぎは雄雌で、スサノヲノミコトとクシナダヒメノミコトにあやかって、縁結び、 夫婦和合の祈願をする。また、古くからうさぎが氏神の使いと伝えられ、祭神が子宝に恵 まれ、うさぎが多産であることから、子授けの神として信仰されている。

下鴨神社、河合神社では、ヤタガラスが有名である。ヤタガラスは、賀茂建角身命の化身とされ、道に迷った神武天皇を助けたとされ、迷いを救い、活路を開く神と信仰され、日本サッカー協会のシンボルマークにもなっている。そして、下鴨神社には、十二支も祀られている。また、下鴨神社の光琳の梅とよばれる梅の木は、尾形光琳の「紅白梅図屛風」のモデルになったといわれている。

上賀茂神社は、御祭神が賀茂別雷大神であり、境内に白馬の神馬がいる。これは神託で馬を走らせたからのようである。また、上賀茂神社では本殿特別参拝とご神宝の拝観が行われていた。上賀茂神社には御祭神を祀る本殿と、横に常設の仮殿である権殿がある。本殿と権殿は全く同じように作られ、置いてあるものも同じである。また、流造の典型として国宝に指定されている。正面の左右に獅子が置かれていたのだが、その後ろの御殿の壁に描かれている獅子の絵は、置かれている獅子の影をもとに描かれたらしいとのことだったので、とても驚いた。宝物が展示されている方では、その獅子などを見ることができた。今回は権殿の前で神職から説明を受けたのだが、本殿の方も屋根の葺き替え作業は終了したようだったので、式年遷宮が楽しみである。

このように、今回の研修では神社にいる動物たちを探して、その動物たちと神社の関係を探っていったのだが、動物は神使や神の化身であったり、人々を助けたりするなど、神と動物、人と動物は密接な関係を持ち続けていたということをあらためて認識できた。他にも色々な神社が動物との関わりを持っているだろう。そして、動物の伝説や言い伝えで類似性や関連性が高いものもあるだろう。また、神使や化身に、どうしてその動物が選ばれたのかなど、もっと深く細かいところまで掘り下げて考えていきたいと思った。今回の研修旅行での体験を今後に生かしていきたいと思う。

日本文化演習を終えて

1部日本文化学科 2年2713170 二木 遥

2015年2月23日から28日までの間、私たちは関西方面を訪れた。北海道では見られない瓦屋根が目立つ関西。日中は春のような暖かさだが朝夕や山の上では底冷えが厳しく北海道並みの寒さを感じた。

1日目は和歌山県にある高野山へ参詣した。高野山で一番印象に残ったのは、その日の宿 としてお世話になった普賢院である。真言宗である普賢院は高野山のほぼ中心部に位置し、 12 世紀、覚王親王が高野山に登山した際、念持仏の普賢菩薩を力乗上人に与えたのが始ま りとされている。普賢院ではまず夕食で精進料理を頂いた。精進料理がどのようなものかも 知らずに夕食会場へ行き、並べられたお皿を見て驚いたのは肉も魚もなかったことだ。主 なメニューは白飯、吸い物、胡麻豆腐、天麩羅、漬物、煮物、果物であった。干し柿の天 麩羅など普段滅多に口にしないものを頂けてとても貴重な体験となった。2 日目の朝のお勤 めでは本堂へ向かい、全員がお焼香をあげた後、お坊さんに説明を受けながら本堂の中を 見学して回った。地下にある曼荼羅は 2 種類の絵があり、花でも表現されていて美しかっ た。地下の中心の部屋には小さな普賢菩薩が飾られてあり、中をのぞくと小さい目を確認 することができる。また、その周りには何体もの小さな仏像が並べられ、それぞれ名前が 入っている。今生きている人の名前もあるそうだ。さらに、天井にあるシャンデリアのも ととなった照明の中をのぞくと小さく絵が見えるのも面白いと思った。地下の周りの部屋 は摩尼車を回しながら歩く部屋となっている。摩尼車とは、回転させると経を唱えるのと 同じ功徳が得られるとされる仏具のことだ。これを回しつつ全部で 6 か所ある足形に自分 の足を合わせながら歩いた。

普賢院を出た後は壇上伽藍や金剛峯寺を見学し、その後、高野山を出て奈良県に入り飛鳥寺を見学した。飛鳥寺は日本最古の本格的な仏教寺院であり、その中には大きな飛鳥大仏が存在する。飛鳥大仏はもともと金で装飾されていたが、鎌倉時代、落雷による火災で仏像自体に施された金と仏像の背景部分の装飾が失われたそうである。仏像の左頬にはその時にできたと思われる傷跡が残っていた。また、飛鳥大仏は中心から向かって見ると真顔をしているが、右斜めから見ると少し厳しい顔をしていて、左斜めから見ると少し穏やかな顔をしているように見える。このような仏像を造る際の工夫が、とても興味深かった。

その後、奈良県天理市に位置する天理教本部を訪問した。バスで天理市に入るとお城のような病院や高校があり、驚いた。天理教は神様を親と見るため「親神様」と呼ばれ、本部の中心に存在する。教祖中山みきは、自分が犠牲になってでも他の人を助けることで自分の身も守られると説く。また、自分の体は親神様からの借り物で、決して自分のものではなく、死ぬときに体を親神様に返し、また新しい体をもらって生まれ変わるとされる。よって魂だけが自分のものである。さらに、親神様の下では人間たちは皆兄弟であり、本部は家のようなものとされている。そのため、24時間365日いつでも無料で参拝すること

ができる。参拝の仕方は正座をして1礼4拍手1礼であり、参拝の場所は特に決まっていない。本部内は広いので、いろいろな場所でたくさんの人が参拝しているところが見受けられた。今まであまり宗教そのものに興味がなく、天理教のことをほとんど知らなかった私はここでの説明や参拝がとても勉強になり印象に残った。

3日目は京都御所を見学した後、グループごとに自主研修となった。これから、自主研修の3日間で回ることが多かった寺や神社を紹介していく。まず梨木神社を訪れた。この神社は和歌が有名で、いくつか歌が刻まれた石碑がある。また、おみくじにも和歌が添えられていた。私が引いたものには、三條実美の歌集『梨の片枝』に収集された1句「九重の都の花は大御代の今を盛りと咲き満ちにけり」という、満開の桜を彷彿とさせる歌が桜の絵とともに書かれていて、春の近さを感じることができた。菅原道真を祀る神社、菅原院天満宮では癌封じの神様が有名で、開くと花の形になる可愛らしい梅みくじを引いた。方広寺は重要文化財に指定されている大きな梵鐘が有名である。その隣の豊国神社は豊臣秀吉を祀った神社だ。

4日目はまず恋の神様で有名な誓願寺を訪問した。その後、和泉式部が祀られた誠心院に続き北野天満宮へ行った。大きな牛の像の周りにはたくさんの梅の花が咲き誇っていた。また、紀貫之や在原業平、小野小町などといった有名な歌人の歌と絵が飾られてあり、しばらく釘付けになってしまった。そしてその次に訪れたのが金閣寺である。正式名称は鹿苑寺で、贅沢に飾られた金が特徴だ。高校の修学旅行で1度訪れたことがあったが、今回は雨だったのでより風情があり、また違う顔の金閣寺を堪能できた。庭園も広くてとても綺麗であった。

5日目は朝から宇治へと向かい、最初に訪れたのは平等院だ。赤く色づいた平等院の上に 2羽の鳳凰が今にも飛び立つかのように立っていた。平等院ミュージアムで印象的だったのは楽器を持った小さな仏像たちだ。楽器の種類が豊富で、今でいうビッグバンドのようなものが昔からあったということが新しい発見であった。また、大きな鳳凰を間近で見ることができたのも良かったと思う。その後は恋の神様を祀る下鴨神社や桓武天皇を祀る平安神宮、最後に清水寺と地主神社へ行った。縁結びの神様が有名な地主神社では目をつぶって遠く離れた石まで自力でたどり着くことができれば願いが叶うという、恋の石に挑戦した。しかし班の仲間から助言を受けながらのゴールで、願いを叶えるためには他の人の助けが必要だとわかった。

この研修で、北海道にいてはあまり感じることのできない日本の文化を存分に味わうことができ、日本の良さを再確認することができた。この経験を忘れることがないようにし、 今後の大学での勉強、卒業論文に大いに役立てていきたいと思う。

肌で感じたこと

2 部日本文化学科 2 年 2813134 福島 千尋

私は、日本文化演習の自主研修で訪れてみたい場所がたくさんあり、正直なところテーマを一つに絞り切れていない。テーマを設定しない分、私が本能的に行きたいと思い訪れた場所、そこで感じたことをこのレポートで書いていく。

まず、京都に行くという段階で最初に考えたことは『源氏物語』に関わる地を見てみたいということだ。そこで私は宇治へ行くことを決意した。日程としては自主研修の最終日であった。そこでは「観光」といった視点からも宇治を見ることが出来た。京都駅から宇治駅、宇治駅から目的地に行くまで地図を一度も見ずに行くことが出来た。なぜなら、駅や宇治のまちには所々に道案内の看板が設置されているのだ。そこから観光客の多さを実感した。また、観光客を目的地まで導くという観光客の受け入れへの配慮を感じることが出来た。宇治市と比べると札幌市は目的地まで行くのが難しいように感じる。道案内の看板の数は圧倒的に少ないかもしれないと感じた。観光都市という点では共通しているが、観光客をサポートする体制はまだまだ改善が必要であると思った。ここまでは「観光」という面から見た宇治である。

次に『源氏物語』という視点から見た宇治について書いていく。印象的だった風景は宇治川である。浮舟が身を投げた川である。自分の勝手なイメージで川というものは、穏やかに流れていてフワッと身を投げたのかなと思っていた。しかし、実際に見た宇治川の水量は多く、流れはものすごく激しい川であった。水のゴォーという音に怖くなるほどであった。浮舟がこの川に身を投げたと考えると、相当な覚悟がなければ出来ないことだと分かった。自分の存在を消したい、この世界から消えてなくなってしまいたいという強い思いを宇治川の激しい流れから感じた。宇治川へ行った時の天気は曇り空で風も冷たく、浮舟のことを想像したら切ない気持ちになってしまった。一瞬、太陽の光が強くなって暖かさを感じた時があった。その時の暖かさは、私にはすごく優しく感じられた。そして、浮舟が宇治川にいた時も空が暗くて冷たい風が吹いていて、身を投げようとした時に太陽が浮舟を照らしてくれていたら、彼女は救われていたかもしれないのに、と想像していた。

じっくり宇治川を眺めた後は源氏物語ミュージアムへ行った。源氏物語ミュージアムでは資料の展示はもちろんだが、映像や照明を使って『源氏物語』を説明しているものが多かった。正直、ミュージアムと聞くと資料が展示してあるだけでつまらないだろうなと思っていたので、映像や照明での説明はとても新鮮だった。そこで浮舟についての映画が上映されていたので鑑賞した。浮舟の苦悩の感情が分かりやすく描かれていた。文章だけでは想像しづらくても視覚・聴覚によって想像しやすくなり、とても楽しい時間であった。源氏物語ミュージアムの後は宇治上神社へと行った。日本最古の神社ということで行ってみた。とても静かな場所で少し不思議な気持ちになることが出来た。その後は世界遺産の平等院に行き10円硬貨と実物を見比べてみたりして宇治を観光した。

宇治の次に行きたいと思った場所は伏見稲荷大社である。行きたいと思った理由は、私が読んでいる漫画に出てくるキャラクターの元になっているからだ。いわゆる聖地巡礼というものである。稲荷駅を出ると目の前に伏見稲荷大社がある。稲荷駅も伏見稲荷大社のような造りと色合いで素敵だった。伏見稲荷大社といえば千本鳥居だろう。千本鳥居の入り口にたつとその雰囲気に圧倒されてしまった。言葉で上手く表現できない何かが自分の周りを廻っていく感覚がした。千本鳥居は一つ一つ奉納した人や企業の名前が入っていて、それを見ていくのも面白かった。途中、日が差してきて何とも神秘的な時があった。鳥居の赤が際立って上を見上げると鳥居の隙間からもれる光、千本鳥居の中を流れていく心地よい風。普段は気にしないようなことが全て神秘的に感じた。そのような不思議な雰囲気の中を歩くことが出来て心が落ち着いた。千本鳥居の途中には、おもかる石が置かれている。持ち上げたときに軽ければ願いが叶うと言われているが、私は重く感じてしまった。まだまだ努力が必要なのだと実感した。それから千本鳥居は最後まで行かず、伏見稲荷大社周辺を歩いてみた。屋台が並び、着物を着た観光客が歩く光景はとても和やかな気持ちにさせてくれた。

観光地で和やかな気持ちになる一方で関西に来て思ったのだが、店員の喋り方がはやい。 会計をしておつりを渡すスピードがはやい。観光地では気持ちが和んでゆったり買い物を したかったのだが、店員のスピードについていくために必死になってしまった。油断して いるとおつりを落としそうになってしまった。会計のスピードは、特に伏見稲荷大社のお 土産屋さんのおばさんがずば抜けてはやかった。お金を渡す時もおつりをもらう時も何と なく急かされている気分になった。ホテル近くのコンビニ店員もなかなかのスピードであ った。私は今まで自分のことをせっかちな人間だと思っていたが、関西ではのろまな人間 であることを実感した。

全日程を通して思ったことは、やはり現地に来てみないと分からないことが沢山あるということだ。ただ、文献などを机の前で見ていては分からない。自分で行ってその地の空気を吸ってその土地の人と話すことでしか分からないことがある。浮舟の心情を想像したり、伏見稲荷大社で不思議な心地になったり、店員の喋るスピードがはやい、そのようなことが分かったのは実際に自分で訪れたからだ。そのことを頭に入れてこれからの勉強を頑張りたいと思った。それと日程中に体調を崩して声が出なくなったことによって、人の温かさを知った。自分を助けてくれた友達や京都の人々に感謝して、自分も他人が困っている時に歩み寄れるような人間になる、という目標が出来た。古いことを学ぶことも楽しいが、今この世界に生きているということを大切にしていきたいと、今回の日本文化演習で考えた。

アニメ『有頂天家族』の聖地巡礼体験

2 部日本文化学科 2 年 2813137 前田 青生

本レポートでは、アニメ『有頂天家族』の舞台である京都を訪ねるにあたり、アニメファンが行う聖地巡礼を体験し、その意味と作品との繋がりについて感じたことを記述していく。

日本文化演習の準備として、見て回る場所を決定し事前に調べたりしている段階で分かっていたことだが、『有頂天家族』では活動場所が左京に集中している。左京は右京に比べて大きな商店街や人の流れが多く、比較的大きな建造物があることや鴨川が流れていることなど、多様な特徴を内包しているため、愛憎や権謀術数入り乱れる作品の舞台としては適しているのだろうと考察できる。

京都に着いてからまず目指した場所は、賀茂大橋である。直前まで、全員で京都御所の見学をしていたために都合が良かったこともあるが、アバンタイトルでも描かれているのが大きな理由だった。『有頂天家族』の主人公・下鴨矢三郎が出町升形商店街を飛び出してこの橋を渡るシーンが、彼の初登場の場面である。近くには下鴨一家の住まう下鴨神社や鴨川デルタがある。原作の小説にはナレーションのみの記述しかなく、映像はアニメオリジナルとなっている。今回は「できそうならアニメの通りに行動」を一つの目安にしていたので、上記2つの探索は後に回した。

次に四条河原町方面を目指した。当初の予定では歩いていくつもりであったが、京都御所から賀茂大橋まで歩いた距離感覚をもとに考えると、交通機関を使うのが無難だろうと思われた。アバンでは矢三郎が一瞬で賀茂大橋から移動したかに見えていたが、原作では存在しない場面であるのに加えて、矢三郎は狸であるからアリなのだろうと考えた。アバンではこの後、花見小路、六道珍皇寺、戎川発電所を矢三郎が駆けていくあたり、実際にある程度回ってみるといかに縦横無尽であるかが経験から伝わってくる。アニメだけを見ていた時点では、兄弟それぞれに縁のある場所を映しているだけだとしか認識していなかった。

地下鉄を使って祗園四条駅で降りた後、階段を上ってすぐのところに京都南座を発見。腰の抜けた赤玉先生が、弁天に手酷くふられてしまう場所である。また、京都南座はアニメ『有頂天家族』のスポンサーのひとつであり、同アニメの先行上映会が行われた場所でもある。裏手でがっくりと項垂れている赤玉先生の映像が浮かぶようであった。

脳内で赤玉先生を置き去りにしつつ、花見小路を抜けて六道珍皇寺へと進んだ。六道珍皇寺は、矢三郎の兄・矢二郎がカエルに化けて住み着いている場所で、母を避けているためか下鴨神社からはかなり遠い。民家の中に埋まっているようでもあり、確かに矢二郎が世間との繋がりを細く維持するには良いところなのかもしれないと感じさせられた。

2 日目の出だしは、地下鉄鞍馬口駅から鞍馬湯という銭湯まで行き、そこから寺町通沿い に南下した。地図で見る分には、升形商店街まで遠いようなものだったが、実際に歩いて みるとそこまでの距離には感じなかった。同時に、腰を痛めてしまった赤玉先生にはやや遠いだろうとも感じた。風呂嫌いの赤玉先生が、風呂から上がった後に車がないと怒っていたのも、その場に居なかった矢三郎を心配していたのと腰が痛いという 2 つの本音を隠すための建前だったのかも、と思い至った。

そのまま升形商店街を散策。ここはアニメ『たまこまーけっと』の中心舞台でもあり、ここを訪れたファンの方やキャラに声をあてている声優の方が、商店街入口に置いてあるノートにメッセージを書き残している。『有頂天家族』に比べてより日常感の強い同作品の、らしさのあらわれだろうか。対照的に検討してみると、『有頂天家族』の方には際立って象徴的な場所は存在していない。このことは、人間社会の間隙に生きる狸らしさをより特徴付けているものだろう。

また余談ではあるが、商店街の寺町通側出口を出たところに、アニメでは竹林亭となっている蕎麦屋・司津屋があり、矢三郎と同じように「玉子丼をひとつ」と注文してみたところ、店内の配置、装飾ばかりか、食器までがアニメで見たものと同じであったため、アニメの再現度の高さを再確認することができた。

最終日には、自転車を借りて祇園から八坂神社前を通って戎川発電所を訪れた。この発電所は水力発電所で、水は鴨川へと放流される。下鴨家と戎川家の関係性を、鴨川との繋がりで象徴しているようで、人物設定の段階からよく考えられていた作品だと感じた。地図を眺めているだけで気付けそうなものでもあるが、巡礼中ひたすら『有頂天家族』のことばかり考えていたから気付けたのではないか、とも思える。

最後に、六角堂の近くにある珈琲蔦屋というカフェに入った。アニメの ED テロップにも協力店として名前が載っている同店では、矢三郎が座っていた席の傍らにその場面の写真が飾ってあり、また『有頂天家族』のポスターが張られているなど、巡礼目的の客を狙った装飾がなされていた。

今回の体験で聖地巡礼に関して感じたことのまとめとして、再現度の高いアニメを採用したのもあるが、目的の場所がはっきりしているため準備や計画が立てやすいこと。子供がよく憧れる「物語の世界に入りたい・行ってみたい」という願望が、ある程度叶うこと。縁ある場所に到達するだけで目的が達成できるなどお手軽感があること。登場人物の行動範囲を体感することで、物語の整合性の確認や理解の支えとなること。以上 4 点となる。特に最後の点は、巡礼中に解釈が追いつく場合の他に、アニメを再視聴した場合にも新たな理解と、自身の旅の記憶を同時に呼び起こしてくれる。

個人的にかなり満足のいく旅であったと思っている。良いアニメを制作していただいた スタッフの方々と原作者の森見登美彦に感謝を述べたい。そして最後に、矢三郎と下鴨一 族とその仲間、ついでに筆者にもほどほどの栄光があらんことを願ってみる。

研修旅行に行って

1部日本文化学科 2年 2713187 間所 夏生

今回、私は日本文化演習の講義を受講し、京都、奈良、和歌山を中心に関西地方へ研修 旅行に行ってきた。その六日間は様々な文化や歴史に触れて私自身の貴重な経験や知識と なった。その六日間の研修旅行についての報告をしていく。

まず初日は、和歌山県にある高野山を訪れた。そして始めに奥之院を巡った。奥之院に は豊臣家の墓所や松尾芭蕉の詠んだ歌が句碑として置かれていて、歴史的に貴重な物をた くさん見物できた。その中で私が驚いたのは、石を積み重ねて作られた塔のようなもので ある。現代の技術があれば作ることはそう難しいことではないが、その塔が作られた当時 は技術がない中で、重い石を高く積むために中を空洞にしたという話を聞き、当時の人た ちの工夫に感銘を受けた。個人的にはヤクルトのお墓のようなものやロケットのような物 もあり、楽しむことができた。そしてその日の宿泊先となった普賢院へ行った。普賢院は お寺でありながら宿泊者向けになっており、W i - F i を使用することができ、大きな浴場 があり、くつろぐことができた。夕飯に精進料理を頂いた。私は精進料理を食べたのが初 めてのことだったため、期待と不安があった。精進料理のイメージは肉がなく野菜中心で 薄味の料理だという印象だった。実際に食べてみると味がしっかりついていて野菜中心の ため体に良さそうな料理であった。他にも天ぷら、白米、お吸い物のようなものやゴマ豆 腐があった。また干し柿の天ぷらを初めて食べた。果物を天ぷらにするということに動揺 したが、食べてみると干し柿の甘さが天ぷらにあっていて美味しく頂いた。普賢院周辺の 町並みは昔ながらの雰囲気とたくさんの自然があり、観光地でありながら素敵な景観が守 られていた。コンビニは2つあった。

翌日の朝7時からお勤めがあり、実際に参加させて頂き、お焼香をした。その後、地下に案内して頂き、貴重な物をたくさん見せて頂いた。中でもお釈迦様のご遺骨と言われている物を見たときに大きな感動を受けた。お釈迦様のご遺骨はいくつにも分けられているようで、普賢院にあった物は小さな丸い球体のようなものであったが、特別な納められ方をしており滅多に見られるものではないため、強く記憶に残っている。曼荼羅の実物も初めて見ることができた。

普賢院を出てから金剛峰寺へ行き、完成間近の門を見た。門の材木として使われている木は近くの木を切り倒して使用しているようで、切り落とされた後の切り株も見ることができた。門の製作費は13億円にもなるそうだ。門はとても大きく、色も鮮やかで圧巻の一言であった。

次に、奈良県へ行き天理教本部を訪れた。宗教的な場所であるため若干の恐怖もあったが、ガイドの方が丁寧に解説してくださり、そのような思いも無くなった。天理教にも古くからの歴史があり、人々が争いなく過ごせるようにとの願いを持つ人々が信仰していることを知った。天理教にも人々の体の痛みを取るおまじないや天理教のお勤めがあり、宗

教的な文化を感じることができた。天理教本部は建物がとても大きく、その面積とお参り に訪れている方の多さにとても驚かされた。世界中に信仰している方がいて、たくさんの 信者が参拝に訪れるそうだ。また、天理教の高校、大学があり若者も多く信仰している。

次に日本最古の飛鳥大仏のある飛鳥寺へ行った。お寺自体はそれほど大きなものではないが、お寺の中にはしっかりと大仏がいて感銘を受けた。以前見た有名な奈良の大仏より小さいが、大きさ以上の存在感があった。昔に火災があり周りの建物は崩れてしまったが大仏は大きな破損も無く残ったという話である。また近くには蘇我馬子の首塚があったが、周りは畑や田んぼに囲まれており、本当にこれがそうなのかと疑問に思う程であった。飛鳥寺を最後に2日目は終わり、奈良県を後にして京都に到着した。

3日目からは京都を巡り京都御所を訪れた。京都御所は敷地面積がとても広く、一通り見学するのに急ぎつつ巡っても一時間弱かかるほど見応えのある場所であった。中でも清涼殿はお寺のような外観で、いかにも身分の高い人が入れる場所だと思うほど立派な建物であった。中学生の時から授業で習い、訪れたいと思っていた場所であったため、今回訪れることができとても良かった。

京都御所を巡った後に3日間の自主研修となり、私たちは「幕末」をテーマに京都の名所を巡っていった。まず初めに訪れたのは二条城。二条城は大政奉還が行われた場所であり、幕末を巡るのならば最初に巡るのにふさわしいと一つ目の場所に選んだ。二条城と言えば二の丸御殿であり、ここはマネキンで当時の様子が再現されている。また音声ガイドにより詳しい解説も聞くことができる。二の丸御殿は国宝に指定されており、大変貴重な歴史遺産となっている。この場所で大政奉還を行ったのだと思うと、とても興奮した。

次に訪れたのは新撰組が拠点を置いていた壬生寺。壬生寺の近くには新撰組が生活をしていた八木邸もあった。色々な都合により壬生寺のみの見学となった。壬生寺は大きなお寺ではないが庭が広く、その庭で新撰組は剣術の練習や相撲や能などの娯楽も楽しんだという。壬生寺の脇道を通って行くと、新撰組の芹沢鴨の墓や新撰組にまつわる石像が置かれている。庭には新撰組のファンが書いていったノートが20冊ほどあり、たくさんの人たちがノートに訪れた証を記していた。私も訪れた証を残して壬生寺を後にした。

そして、最後に霊山歴史館を訪れた。霊山歴史館では幕末にまつわる貴重な品々が展示され非常に見応えがあった。中でも坂本龍馬暗殺に使用され実際に竜馬を斬った小刀が展示されていた。そして坂本龍馬の実寸大マネキン、このマネキンは体毛までリアルに表現されていた。またジオラマで龍馬の最後の一瞬が再現されていて、当時の状況が非常にわかりやすく展示されている。わかりやすい説明もついていて幕末の流れを理解しやすくなっている。幕末を知りたいならばこの歴史館を訪れるのが一番だと個人的に感じる。霊山歴史館を出て少し歩いた先に坂本龍馬の墓もあり、最後に手を合わせて幕末を巡る研修を終えた。

最後に、今回の研修を通してさらに歴史や文化についての知識が広がり、残りの学生生活で様々な場所を巡っていきたいと感じた。

動物のいる神社を訪ねて

1 部日本文化学科 2 年 2713199 横井 芽生

自主研修のテーマは、「動物のいる神社」だった。いくつかの神社を訪ねた中で、一番印象的だったのは、いのししのいる護王神社だ。狛犬のかわりに狛猪像があり、全国から奉納されたいのししコレクションが展示されているなど、境内のあちこちにいのししの姿を見ることができた。その護王神社に祀られているのは、和気清麻呂とその姉の和気広虫(わけのひろむし)である。護王神社の壁には、和気清麻呂といのししに関する伝説が絵巻として飾られていた。

奈良時代後期、称徳天皇と当時絶大な権力を持っていた法王・道鏡の怒りを買ってしまった和気清麻呂は、足の筋を切られ、大隅国(鹿児島県)へ流罪となってしまう。和気清麻呂の一行が豊前国(福岡県東部)に着いた時、どこからか約 300 頭のいのししが現れ、道鏡の放った刺客から守るように清麻呂の乗っていた輿の周りを囲んで道案内をしてくれた。宇佐八幡に到着するといのししは姿を消し、立てないほどだった清麻呂の足の痛みもなくなっていた。和気清麻呂を祀る護王神社では、狛いのししが今も清麻呂を護り続けている。

この話から、護王神社は足腰の健康にご利益があるとされている。お年寄りやスポーツ 選手が訪れることも多いそうだ。境内には足萎難儀回復の碑があり、足型の石の上に乗る ことができるようになっていた。石の大きさは様々だったが、私が実際に乗ってみた石は 意外に高かったので驚いた。また、手水舎ではいのししの像から水が出るようになってい たり、休憩所の壁にはいのししの頭の剥製が飾られていたりと、神社全体がいのししだら けでとても印象に残った。

和気清麻呂は流罪になった時、名前を別部穢麻呂(わけべのきたなまろ)に、姉の和気 広虫は別部狭虫(わけべのさむし)に改名させられたのだという。高校の日本史の授業でこの話を聞いて以来、「清い」を「穢い」に、「広い」を「狭い」という正反対にするというこの名前を考えた人はネーミングセンスがあるなと面白く思い、また清麻呂と広虫の二人にも強い関心を持っていたので、今回の研修旅行で護王神社を訪れることができて良かったと思う。

次に印象的だったのは、岡崎神社だ。狛うさぎや招きうさぎなど数多くのうさぎがいる神社である。岡崎神社は、付近一帯が野うさぎの生息地であったことからうさぎが神使とされ、野うさぎは多産なことから安産・子授けの神社として信仰されている。本殿前にある狛うさぎは、向かって右が雄で阿形の口をしていて、左が雌で吽形となっている。頭をなでることで縁結び・夫婦和合の祈願となるそうだ。また、本殿には一対の招きうさぎがいて、向かって右が左手で招く縁結びのうさぎ、左が右手で招く金運のうさぎだった。手水舎には黒御影石でできた子授けうさぎ像があり、水をかけてお腹を擦り祈願すると、子宝に恵まれ安産になると信仰されている。その他にも、提灯にうさぎの絵が描かれていた

り、うさぎの形をしたお守りが売られていたりととても可愛い神社だった。レポートを書くにあたり改めて岡崎神社について調べてみると、狛うさぎの後ろにいる狛犬の台座にうさぎが彫られていたり、親子のうさぎの像があったりと見逃してしまったうさぎがたくさんいたので、ぜひまた訪れて探してみたいと思った。

動物のいる神社を訪れるのには、その神社の動物のおみくじをひくという目的もあった。 前述の護王神社では、いのししの形をした土鈴のような焼き物におみくじが入っていて、 岡崎神社のおみくじはうさぎの形をした焼き物に入っていた。いのししのおみくじは、黄 色やピンク、青など様々な色のものがあり、カラフルで目を楽しませてくれた。うさぎの おみくじはピンクと白の二種類で、それぞれ形が少し異なっていたので雌と雄なのだろう かと思った。もしそうなら、岡崎神社は縁結びの神社でもあるのでそこに由来しているの かもしれない。

他の神社でも動物のおみくじをひいた。りすが神の使いとされている平野神社では「り すのおつげ」と呼ばれるおみくじがあった。桜を持っている焼き物のりすの尻尾の部分に おみくじが挟まれている。平野神社は桜の名所としても有名だが、まだ咲いていない時期 だったので、満開の時に改めて参拝してみたいと思った。早咲きの品種である魁(さきが け) 桜という平野神社発祥の桜があり、この桜が咲き始めると都のお花見が始まると言わ れているそうだ。また、上賀茂神社では、八咫烏のおみくじと馬のおみくじをひいた。馬 は木でできていて、おみくじを口に挟んでいた。ひいたおみくじを結ぶ所が今年の干支で ある未になっており、おみくじを結ぶと未の毛のようにどんどんふかふかになるようにさ れていて面白いと思った。そして、上賀茂神社には神馬という馬がいて、日曜日や祭日に のみ見ることができるそうなので、これも見に行ってみたいと思った。上賀茂神社は今年 が式年遷宮の年であるが、伊勢神宮が20年に一度なのに対し、上賀茂神社では遠慮して21 年に一度行っているという説明が興味深かった。また、神社ではないが六角堂では「幸福 鳩みくじ」という鳩のおみくじをひいた。止まり木に見立てたおみくじに鳩が止まってい るように見えるおみくじだ。境内には驚くほどたくさんの鳩がいて、鳩がそれほど苦手で はない私も恐怖心を抱くほどだったので、鳩や鳥が苦手な人が訪れるのは難しそうなお寺 だと思った。

それぞれの神社で合計 6 個のおみくじをひいたが、全てのおみくじを並べてみて、他の種類の動物のおみくじも欲しくなってしまった。おみくじの結果も、初めにひいたいのししのおみくじのみが大吉で、あとは末吉ばかりという少し残念なものだったので、リベンジの意味も込め、いつの日か今回は行くことのできなかった動物のいる神社、そして動物のおみくじのある神社めぐりをしてみたいと思う。

京の街なみと職人文化

2 部日本文化学科 2 年 2813143 吉田 早絵

京都は様々な文化や歴史が多い街である。日本でも有数の観光名所として知られている。 平安時代から続く碁盤の目に沿った街構造であるのも、京の街の特徴の一つである。今回、 私が京都の自主研修で行ったのは、龍安寺や京菓子資料館などだが、特に重点的に記述す るのは京都文化博物館である。ここでは京都の建物や街なみの歴史と、今の京都に至るま でに積み上げられてきた文化について、数多くの資料が展示されている。

館内はゆったりとしたスペースと静かな雰囲気であった。昔の屋敷の模型に、祇園祭りについての資料や展示品などがあちこちに飾られていた。館内の中にいる人は私より年上の大人が多く、中には外国人の姿もみられた。また学芸員さんが何人かいて、館内で観覧している人達に説明をしている姿があった。

館内の資料では約千年前の平安時代、つまり天皇が政治を行っていた時の京都の簡単な地図がのせられていた。図面には街の中心として最初に平安宮があった。平安宮は政治の中心であり、天皇が鎮座している所でもある。この天皇がいる平安宮から、右京と左京に分けられる。平安宮は行政官務が設置され、十四の門で中の建物が囲まれている。そこから都の玄関である羅生門まで、朱雀路が走っている。朱雀路は幅が八十四メートルであり、現在の名前は千本通りとされている。私達からみて図の平安宮は北側の奥にあり、すぐ右下は神泉苑(しんせんえん)という自然が存在している。ここは平安以前からあった自然を生かした禁苑であった。その更に下、南側の左右に位置するのは、東西の鴻臚館である。鴻臚館とは、当時の外国使節を接待する迎賓館であった。ちなみに、神泉苑は現在も観光地として存在している。

また、その頃の貴族の屋敷についての説明もあった。例えば関白藤原頼通の屋敷は、「高陽院」と呼ばれる。現在の丸太町と油小路通りの交差点付近を中心に存在していたらしい。約二百五十メートル四方の敷地に大きな屋敷を構えていて、この世のものとは思えない程の素晴らしい屋敷と『栄華物語』には記されている。恐らく今の私達には想像できないくらいの豪邸であったに違いない。平安時代、このような栄華を極めた京都の建物は無くなっているものも多いが、基本的な碁盤の目の街なみはその頃から変わっていない事がわかった。だが、寺院や大仏が数多くある街に改造したのは、豊臣秀吉でもある。応仁の乱以降、焼けた京を改造し、近世の京の街の基盤を造ったのが秀吉であった。実際、私自身が京都の街を歩いて思ったのだが、寺院が異様に多かった。そこが寺院の集中している地域だったのかもしれないが、少し歩いたら寺、また少し歩いたら寺と沢山の寺院が道中にあった。また、普通では通り過ぎるような民家の通路に、平安貴族の屋敷跡がわかる看板がひっそりと立っているなど、千年の歴史を感じさせる土地の片鱗がみえた気がした。

しかしそんな京都は一度、没落をしたのだという。きっかけは明治維新時の天皇の東京 移住である。平安時代から長年住んでいた京都から、東京へと移動したのである。それに 伴い、多くの貴族も東京へと移り住んだ。そこから京の都は一気に衰退し、一時は荒れ放題になったらしい。では、それをどうやって乗り切ったのかと、博物館を観覧している途中、ある一人の学芸員さんと話をした。その学芸員さんの話は興味深いものであった。新しい時代で、京都はどう街を再生していったのか、わかりやすく教えてもらった。近代にどう街が盛り返していったのかというと、最初に小学校を建設して学問の基礎を造り、公共施設などの整備をしたらしい。しかしその中で極めて重要なのは琵琶湖の水事業であった。近くの琵琶湖の水を引き発電させ、街を発展させていったのが一番の大きな事であると学芸員さんは語っていた。こうやって積極的に街の為に企画し、もぬけの殻だった都を都市として発展させていった京都の活力は、目を見張るものがあると思った。

それから京の街の他にも、私には調べてみたい事があった。それは過去の京都の土産品や、観光地としての京都である。私達にとって「京もの」というのはブランドや土産物というイメージが定着しているのだが、昔はどうだったのか気になったのだ。調べてみると、やはり江戸時代でも旅の名所として、観光客が多く訪れている事がわかった。江戸時代といえば、旅が盛んに行われた時代でもある。伝統的な都や文化がある京都は、観光地としてもその当時から魅力的だったのに違いない。館内の資料によると様々な案内書などが出版されていたとあった。また、伝統技術を誇っていた京都の町人は経済活動を展開し、西陣織や工芸品などをうみだしたという。恐らくその頃から「京もの」というブランドは確立され、全国の市場に出回っていたのだ。こうしてみれば、今も昔も大差無く私達は京都というものに惹かれていったのが理解できる。昔の人達も恐らく、古くから帝が住む都に対して興味というか憧れのようなものを抱いていたのだろうか。

最後に学芸員さんは「京都は大きい会社が一つか二つぐらいしか無いけど、町人の技術によって支えられている」と言っていた。確かに思い出してみれば、京の街をテレビでみた時や実際に歩いた時などに、大きな会社はみかけなかった。つまり本当に京都は先人が残していった技術や遺産を受け継いで、今まで街を支えてきたのだろう。札幌には多くのビルや、大きな会社が多い。それが悪い事だと思わないが、それと比べると京の街はまさしく「人」と「技」の街なのだと思う。世界遺産の建物ばかりではなく、そういった所も後世に受け継がれていくのは感慨深いものがあった。

ちなみに、ここで取り上げた施設は一つか二つぐらいしか無かったが、その他にも沢山の施設や観光地をまわってきた。どこも興味深く面白いものだと感じた。特に思い出深いのは、祇園である。私は二回祇園に行ってきたのだが、多くの観光客に紛れて本物の舞妓さんを二回もみる事が出来て嬉しかった。学芸員さんや、店の人達など優しい人達が京には多く、また機会があったら、もう一度行ってみたい。

京都の庭園

2部日本文化学科 2年 2813144 余西 拓也

私が今回、この日本文化演習で調べたテーマは「京都の庭園巡り」である。当初は「京都の芸術」についてであったが、それではあまりにテーマが大きすぎるので、今回は庭園についてのみに絞ることとした。しかし、京都の庭園については他のグループもテーマにしているので、単独グループでありながら題材が重なってしまっていることに多少の罪悪感を持ちつつも、できるだけ重なる題材が少なくなるよう、なるべく多くの庭園を巡ることに専念した。

今回巡った庭園は六ヶ所、東福寺の「方丈庭園」、建仁寺の「大雄苑」、天龍寺の「曹源池」、龍安寺の「石庭」、大仙院の「枯山水庭園」、そして銀閣寺の「池泉庭園」である。この他に、金閣寺や伏見稲荷大社など、特に伏見稲荷大社には自分の完全な趣味で四度も登ったのだが、テーマとは何ら関わりがないのでこのレポートでは取り上げないことにする。庭園には三種類あり、池泉庭園、枯山水庭園、茶庭とあるが、このレポートでは、池泉庭園と枯山水庭園を中心に、これらの庭園を一つ一つ簡単にではあるが紹介しようと思う。

まず最初に取り上げるのは、おそらく京都の庭園の中で最も有名なものの一つであろう、 龍安寺の石庭についてである。世界遺産にも登録されている枯山水庭園であるが、その作 庭家、作庭年代はハッキリと分かっていない。白砂に七・五・三と置かれた石が、虎が子 を連れて歩いているように見えることから別名「虎の子渡しの庭」と呼ばれている。禅の 教えとして、15を満としながら常に精進するようどこから見ても 14 個にしか見えないよう に石が配置されているが、実際に見てみても全て見えるところはなく、当時の作庭家の技 術力の高さに驚かされた。この日は雨だったが、庭園を巡っている際に寺のガイドさんが 口にしていた「雨は庭のご馳走」の通り、白砂が雨に濡れてその白さを際立たせていた。

次に取り上げるのは、嵐山にある天龍寺の曹源池についてである。鎌倉時代に有名な作庭家夢窓疎石によって作られた庭園で、京都の庭園の多くは枯山水庭園であるが、この庭園は池泉回遊式庭園と呼ばれる、実際に水の池がある庭園である。名前の由来は禅の言葉にある「曹源一滴」から。庭園のサイズとしては特に大きなものの一つであり、池の中央奥には「龍門爆」と呼ばれる中国の登竜門伝説に基づいて組まれた滝石組と、日本最古と言われる3枚からなる石橋が置かれている。また、この庭園は嵐山と亀山を借景とする借景の代表的な庭であり、それらの山々と合わさって壮大なスケールの景観となる。この日は霧がかかっていたがそれでも十分すぎるほど壮大なものだった。

次に紹介するのは、千利休ともつながりの深い、大仙院の枯山水庭園である。この庭園は室町時代に作られたもので、方丈と呼ばれる本堂を囲むように庭園が配置されている。 深山幽谷の蓬莱山とそこから流れる川を表した三段の枯滝石組と自砂が、小さな空間ながらダイナミックな景観を表現している。さらにその白砂が流れた先の大河の庭には舟石があり、日本最古のもので後の舟石のモデルになったと言われている。最終的に白砂は南庭 にまで流れ、大海原を表した白砂と盛砂のみのシンプルなものとなる。これら一連のものは、修行によって悟りを開き、雑念を払うことも同時に表している。千利休が花を生けた 石など、当時の面影を残したものが多数あり、非常に興味深かった。

次に建仁寺の大雄苑についてである。風神雷神図屛風に目が行きがちだが、建仁寺にもそれぞれ趣の違う枯山水庭園がいくつかあり、それぞれに「大雄苑」「潮音庭」「○△□の庭」と名付けられている。大雄苑は紋様のついた広い白砂の庭で、潮音庭は中庭にありこけや石、紅葉など自然を中心にしたものとなっている。○△□の庭は中央の苔で○、盛砂で△、井戸で□を表し、宇宙の根源形態を示していると言われている。それぞれ庭のタイプが違うので、見ていて飽きないものだった。

続いては銀閣寺である。銀閣寺には独特の紋様のついた白砂の銀沙灘が有名だが、銀閣寺の庭自体は枯山水庭園ではなく池泉回遊式庭園である。近くには現在も茶を沸かす際に使われる湧水の出る茶の井があり、展望台からは錦鏡池を中心に、銀沙灘や向月台、銀閣寺全体が見渡せるようになっていて非常に素晴らしい景色だった。

最後に取り上げるのは、この庭園巡りの中で自分が最も好きな庭である、東福寺の方丈庭園についてである。この枯山水庭園は昭和14年に重森三玲によって作られたごく最近の庭園である。方丈を中心に東西南北に配置されたアートな庭は、釈迦の生涯の8つの重要な出来事を表す「八相成道」にちなんで作られたことから別名「八相の庭」とも呼ばれている。まず南側の方丈南庭は、奥に巨岩を置き白砂には独特の渦巻く砂紋によって海が荒れていることを表している。東側には北斗の庭と呼ばれる庭があり、昔トイレに使われた柱石の余石を利用して北斗七星に見立てた斬新なものとなっている。後ろには天の川を表した生垣が植えられ、庭全体が夜空のように見えるかのような作りになっている。方丈西庭の方はくず石を方形に組んで井田を、サツキの刈り込みと砂地で市松模様を表した作りになっている。最後に北側の方丈北庭である。この庭はウマスギゴケと敷石を使った市松模様になっており、札幌大通公園やモエレ沼公園で有名なイサムノグチもこの庭を「モンドリアン風の新しい角度の庭」と賞賛するほどだった。日本庭園の伝統を踏まえつつ、斬新な技法を駆使したリサイクルかつモダンなデザインは、これまで見てきたどの庭園とも違っていて、最も印象に残る庭園となった。

今回の研修旅行は常に驚きと興奮に満ちたものとなった。行く先々で新たな発見があり、 自由行動の内容も少々無理のあるものだったが全て回れたのでとても貴重な体験となった。 もし次、京都に行く機会があったなら、今度は今回巡れなかったほかの庭園についても、 もう少しゆっくり時間をとって巡りたいと考えている。

平成26年度 日本文化演習報告書 第4号

発行日 平成27年3月26日

発 行 北海学園大学人文学部

印 刷 株式会社アイワード